

慶應義塾大学総合政策学部

2013年度 卒業論文

ドイツにおける  
「統合コース(Integrationskurs)」から見る移民政策  
-ノイケルン(Neukölln)市民大学での参与観察を通じて-

指導教員 藁谷郁美教授

学籍番号 71000334

日付 2014年2月3日

氏名 池田真梨子

## 目次

序章 .....	5
第一節 研究背景.....	5
第二節 研究目的.....	6
第三節 仮説と検証方法 .....	6
第一章ドイツにおける移民の受入れ経緯.....	8
第一節 ベルリンの壁設置以前 .....	8
第二節 ベルリンの壁設置以後 1961.....	8
第三節 東西ドイツ統一以後 1990 .....	9
第二章 「外国人」から「移民」へ.....	10
第一節 コール政権下「外国人問題」 .....	10
第二節 国籍法の改正 .....	10
第三節 外国人法の改正 .....	12
第三章 トルコ人の海外進出 .....	12
第一節 トルコ政府の期待 .....	12
第二節 トルコ労働者の期待.....	13
第三節 ドイツから見たトルコ人の魅力 .....	13
第四章 トルコ人移民の問題点.....	14
第一節 同化しないムスリム .....	14
第二節 犯罪の増加.....	14
第三節 リュトリ基幹学校 .....	15
第五章 ドイツにおけるイスラム排斥 .....	15
第一節 ドイツ国内におけるイスラムへの見方.....	15
第二節 ケルンでのモスク建設を巡る論争.....	18

第六章 ドイツ国内における意見の相違.....	19
第一節 ドイツ語の必要性.....	19
第二節 国民の意識.....	21
第七章 統合コースとは.....	22
第一節 概要.....	22
第二節 構成の変化.....	23
第三節 統合の失敗.....	24
第八章 参与観察.....	25
第一節 統合コース.....	26
第一項 概要.....	26
第二項 受講者の属性.....	27
第三項 教材.....	29
第四項 授業の進行.....	31
第五項 教員と受講者の関係性.....	33
第六項 受講者間の関係性.....	34
第七項 考察.....	34
第二節 オリエンテーションコース.....	35
第一項 概要.....	35
第二項 受講者の属性.....	35
第三項 教材.....	38
第四項 授業の進行.....	41
第五項 教員と受講者の関係性.....	44
第六項 受講者間の関係性.....	45
第七項 考察.....	46
第九章 終章.....	47

参考文献 ..... 49

図表リスト ..... 51

## 序章

### 第一節 研究背景

1950年代に始まった西ドイツの「奇跡的経済復興(Wirtschaftswunder)」は深刻な労働不足を引き起こし、これを補うために「ガストアルバイター(Gastarbeiter)」と呼ばれるトルコ人の受け入れを積極的に行ってきた。ドイツ語のガスト Gast から分かるように、彼らは長期滞在しない一時的労働者という意味が込められていた。1973年の石油危機で受入れが中止されるも、彼らが母国に居る家族を呼び寄せ始め、2010年にはドイツ人人口の約5人に1人が移民の背景を持つものとなり、トルコ移民がドイツ総人口の3.1%(255万人)を占めている<sup>1</sup>。日本の外国人人口が約1.7%であることと比較すると、ドイツ国内におけるトルコ移民がいかに多いか容易に想像がつく。

トルコ移民の増加に伴って、ドイツに馴染むことが困難なトルコ移民が多く存在し、彼らをドイツに社会統合<sup>2</sup>するよう打ち出されたのが「統合コース(Integrationskurs)」である。統合コースとは、2005年に制定された移民法(Zuwanderungsgesetz)<sup>3</sup>において、今後ドイツに定住する外国人に対し、ドイツ語(Sprachkurs)のみならずドイツの法律や歴史、文化、価値規範など(Orientierungskurs)の習得を目的に参加を義務づけるものである。

統合コース開始以後、移民問題に対する解決策の1つの例として日本でも概要や現場の実態がしばしば取り上げられ、論文も数多く執筆されている。例えば、内閣府経済社会総合研究所の丸尾 眞が2007年に執筆した、「ドイツ移民法における統合コースの現状及び課題」では、移民問題の経緯から統合コースの概要、そして2005・2006年に実

---

<sup>1</sup> 松田雅央『トルコ系移民が増えて、どんな問題が起きているのか』Business Media 誠、2010年 <http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1012/15/news033.html> (最終閲覧日: 2014年1月16日)

<sup>2</sup> 『ドイツが進めている移民統合政策においては、「統合(Integration)」は「同化(Assimilation)」とは異なり、固有の文化的アイデンティティの放棄を要求するものではない。』(ドイツ訪問中のエルドアン首相との会談後のメルケル首相の発言, „Merkel und Erdogan für bessere Integration, “ DW-world.de, 2010.10.9)金箱秀俊『移民統合における言語教育の役割 —ドイツの事例を中心に—』2010 p.54より引用  
<http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/refer/pdf/071903.pdf> (最終閲覧日: 2014年1月16日)

<sup>3</sup> 正式名称: Gesetz zur Steuerung und Begrenzung der Zuwanderung und zur Regelung des Aufenthalts und der Integration von Unionsbürgern und Ausländern (移民の調整と制限並びに欧州連合市民および外国人の滞在と統合の規制に関する法律)

施された統合コースの評価、改善等が詳細に記載されている。2011年には、獨協大学ドイツ学研究非常勤講師の前田直子によって執筆された「移民向け統合コースに関する一考察 ―オリエンテーションコースに参加して―」では、筆者が実際にバーデン・ヴュルテンベルク州ヴィースバーデン市(Baden-Württemberg, Wiesbaden)の語学学校で受講したオリエンテーションコースについて報告している。

しかし、どちらの先行研究も、従来多く述べられている一定の視点から移民問題に関して議論されていることが分かる。例えば、キリスト対イスラムの宗教問題や労働市場としての社会問題に特化したものが挙げられる。本研究では、従来の伝統的な視点からではなく、教育に着目して議論を展開していく。移民問題の経緯や従来取られてきた政策の資料調査を行い、実際に筆者が統合コースの参与観察を行うことで現場の生の声を吸収し、持論を展開していくことに本研究の意義がある。

## 第二節 研究目的

日本では少子高齢化が進み、今後ますます人口減少が深刻化していく中で、移民を受け入れるべきか否かが議論されている。移民を受け入れざるを得ない状況に万が一なつたとした場合、大きな問題となりうるのが移民に対する日本語教育である。日本語は他の言語と異なり、使用される文字が日本独特のものであり、外国人にとって日本語を習得することは容易ではないことは簡単に想像できる。

一方、ドイツでは戦後復興のために受け入れてきたドイツ語を話せない移民が長期滞在して増加したことにより、言語教育の面で様々な政策を行ってきた。そのうちの一つが今回の取り上げる統合コースである。ドイツで行われている統合コースを自ら実際に参加して検証することにより、今後日本で起こりうる移民に対する語学教育の面で1つの成功例として参考にすることが可能となる。

## 第三節 仮説と検証方法

### 仮説

現在ドイツで実施されている統合コースの実態は、従来から議論されている移民問題とは異なり、かつ政府や州が掲げる移民受け入れ政策と実際に行われている現場での政策には乖離があるのではないかということである。そもそもドイツが移民を受け入れ始めるようになったきっかけとして、戦後の労働不足を補うためということが挙げられる。そのため、かつて移民の多いエリアはルール地方(Ruhrgebiet)の工業地帯があったドイ

ツ北西に位置するノルトライン・ヴェストファーレン州 (Nordrhein-Westfalen) であり、今でも外国人人口が最も高い州である。しかし、現在ではベルリン州 (Berlin) やバイエルン州 (Bayern) といった、大都市にも外国人や移民が多く生存している。従来から議論されている労働市場問題や宗教対立問題ではなく、教育といった観点から近年増加している移民問題について議論を展開していく。また、政府主導による莫大な費用をかけた統合コースは、移民に対してどういった思想やドイツで生きて行くための考え方を共有するために実施されているのか、また政策と現場の相違点があるのではないかと、という仮説をもとに以下の検証方法で紐解いていく。

### 検証方法

- ① そもそもドイツで移民が増加した理由を歴史的背景から探り、どういった経緯で統合コースが実施されるようになったかを時代別に第一章から第四章まで検証していく。それに付随し、移民増加によるドイツ国内での状況の変化や、ドイツ国民における移民受け入れ体勢についても第五章から第六章で言及していく。
- ② 2005 年から実施された統合コースの概要や受講状況について、ドイツ連邦移民・難民庁のデータをもとに第七章で検証していく。
- ③ 第八章からは、自ら実際にベルリン・ノイケルン (Berlin・Neukölln) 地区で実施されている統合コースの参与観察を行った研究を述べていく。語学コース (Sprachkurs) とオリエンテーションコース (Orientierungskurs) にそれぞれ 1 週間ずつ参加し、授業の進行状況や使用教材のみならず、受講者間もしくは受講者と教員の関係性についても着目しながら現場の状況を把握し、実際の統合コースの現状を捉える。
- ④ 参与観察する 2 クラスそれぞれにドイツ語でのアンケート調査を行い、受講者の属性を知る。受講者の渡独理由や滞在年数、家族構成、家庭内での言語などを質問し、そこから共通点や相違点を見だし、現状を受講者視点から分析する。また、非公式のインタビューを行い、その内容も調査対象とし、アンケート調査と非公式インタビューをもとに解析していく。

## 第一章ドイツにおける移民の受入れ経緯

### 第一節 ベルリンの壁設置以前

ドイツでの外国人労働者雇用は 1 世紀以上も前から始まっており<sup>4</sup>、第一次世界大戦前にかけて急激に増加し、多くはポーランドやハンガリーといった東欧諸国からの農業労働者で、1907 年には全労働人口の 4.1%にあたる 80 万人近くの外国人労働者が存在した。1933 年には、ナチス政権下の旧ドイツ第三帝国で新たな外国人労働力受入が起こり、第二次世界大戦時に外国人労働者と戦争捕虜がドイツ経済を支えていたのは周知のとおりで、開戦前にはすでに 525 万人の外国人労働者が戦場に出向いたドイツ人労働者 1100 万人の穴埋めを行い、終戦後の 44 年には 750 万人にも上った。

### 第二節 ベルリンの壁設置以後 1961

戦後ドイツが東西に分裂しベルリンの壁が設置された 1961 年以後、西ドイツの移民受入れ体制も変化していった。東ドイツの生活は西ドイツと比較し、非常に住み心地の悪さを感じるものであった。そのため、西ドイツに逃亡するものや職を求めて西ドイツに通勤しているものも多かった。しかし、それを気に食わなかった当時のソ連は、ベルリンの壁を設置し、東ドイツから西ドイツへの移動を不可能なものとした。結果として、東ドイツの国民は東ドイツでの生活を強いられ、ソ連に従うしか方法はなかった。これだと東ドイツだけが影響を大きく受けたと思われるが、そうではなく、西ドイツにとっても大きな打撃となったのである。それは、従来は東ドイツからの労働者を多く雇用していたのだが、一切止まってしまったことである。戦後、経済が悪化の一途をたどる中、人手不足を解消するために東ドイツから労働者を迎え入れていたのだが、それが不可能となってしまったのである。そこで考えたのが、海外からの労働者を受入れることである。

「就職を希望するトルコ人労働者を自国の使用者のもとで雇用したいとのドイツ連邦共和国政府の申し出により、外務省 1961 年 10 月 30 日付 505-版 83SVZ/3-版 92-4 号協定が締結される運びとなり、トルコ大使は栄光の意を表するものである。」<sup>5</sup>1961 年に西ドイツ、トルコ間で協定が結ばれ、トルコからの渡独が促進された。1955 年イタリア

<sup>4</sup> 野中恵子『新版ドイツの中のトルコ -移民社会の証言-』つげ書房新社、2007 年、p. 13-14

<sup>5</sup> T.C. Disisleri Bakanligi Ekonomik ve Sosyal Isler Genel Mudurlugu: Yurtdisi Goc Hareketleri ve Vatandas Sorunlari, p.137

トルコ-ドイツ連邦共和国労働者派遣協定全文 野中恵子訳より引用。



との二国間労働者派遣協定締結を皮切りに、60年ギリシア・スペイン、61年トルコ、63年モロッコ、64年ポルトガル、65年チュニジア、68年ユーゴスラビアと、わずか15年足らずで数多くの国々と労働者協定を結び<sup>6</sup>、外国人労働者を積極的に受入れて来た。出稼ぎ労働者は急速に増加し、西ドイツ国内の経済は彼らで支えられていると言っても過言ではないほどとなった。1966年に西ドイツで一時的な景気後退が起こり、当時130万人いた外国人労働者のうち約3分の1が帰国を余儀なくされたが、翌年に景気が回復すると、今まで以上の外国人労働者を受入れるようになった。

しかし、石油危機が勃発した1973年、ケルン・フォード自動車工場でトルコ人の指揮による大規模な外国人労働者ストライキが発生したことやドイツ人の失業率増加が原因で、トルコとの労働者派遣協定を一時的に破棄してしまう。西ドイツは、外国人労働者数を減少させるために行なった協定であったが、逆にトルコ人の増加を促進させてしまった。外国人労働者閉め出し宣言の翌1974年、多くのトルコ人労働者がドイツへ家族を呼び寄せたのである。

政府の想定に反してトルコ人がさらに増加した状況に対して、西ドイツは1983年に、「帰国奨励法」(Rückkehrhilfegesetz:通称 RückHG)を定めた<sup>7</sup>。再びドイツへ出稼ぎにこないことが条件で、帰国を受け入れる外国人労働者に1万500マルク(約120万円)、その子女一人当たり1500マルクが、帰国1年後に支給されることとなる。さらに、西ドイツで積み立ててきた保険金が即戻されることとなった。しかし、この施行は11ヶ月で終わりを告げ、実際に帰国した労働者は10万人を越えたが、これを越える数の労働者が西ドイツに申請し、結局は西ドイツ側が大きな費用を負担することとなったのである。当時、在独10年を越える青少年が半数を越え、ドイツ生まれはその3分の2を占め、母国語を全く理解できない外国人が多かったため、外国人労働者もそう簡単に帰国しようとは考えていなかったのであることが想定される。

### 第三節 東西ドイツ統一以後 1990

ベルリンの壁が設置されたことにより、東ドイツからの人口流出が停止し、それを埋めるためにトルコ人が出稼ぎにきた。しかし、1990年に東西ドイツが統一した。統一後のドイツにおけるトルコ人はどうなるであろうか。この時、2点の事柄が懸念されていた。1点目は、東ドイツの復興のために建設にとりかかるトルコ人が増加するのでは

<sup>6</sup> 岡本奈穂子『多文化社会を考える -ドイツの変容と日本の未来-』かわさき市民アカデミー講座ブックレット No. 32、2008年、p. 6-8

<sup>7</sup> 野中恵子 p. 96-97

ないかという予想である。トルコ人はドイツ人と同等の仕事はなかなか与えられず、ドイツ人の嫌う職を与えられていた。しかし、能力のないトルコ人は西ドイツから締め出される。そんなトルコ人が需要にみあった人材として旧東ドイツに移動できると考えられていたのである。2点目は、旧東ドイツの人間が旧西ドイツに労働力を求めて移住してくることにより、そこで働く外国人、特にトルコ人との摩擦が起こることである。旧東ドイツの人々の生活をいち早く安定させることが重要視され、外国人への保証は二の次とされ、トルコ人の多くが失業者となるのではないかと予想されていた。しかし、実際はどちらも部分的に実現した。また、旧東ドイツから旧西ドイツへ一気に34万人もの労働者が流れた結果、旧東ドイツ人と外国人との摩擦が起き、ネオ・ナチによる外国人襲撃事件も増加した。外国人の社会保障も後回しにされ、外国人の立場が一気に弱体化した。

## 第二章 「外国人」から「移民」へ

### 第一節 コール政権下「外国人問題」

戦後のドイツで「奇跡の復興」と言われるまで経済成長を遂げた背景には、二国間協定を結び海外からの移民を受け入れてきたことを上記で述べた。多くのガストアルバイターが長期滞在するようになり、80年代のコール政権<sup>8</sup>下では外国人問題として扱われるようになり、マスメディアでも「外国人政策(Ausländerpolitik)」<sup>9</sup>の記事が多く掲載された。当時行われた帰国奨励は、「(西)ドイツは移民国ではない」という基本理念に経ったものであり、この策は外国人の自主的な帰国を促し、「移民国ではない」ドイツ社会への負担軽減を図る目的で行われた。しかし、実際には外国人人口の増減に大きな変化は見られず、かえってドイツで生まれ育った子供が故国での生活になじむことができず、再びドイツへ戻ってくるといった事態が起こり、外国人問題はそう簡単に解決できるようなものではないということを世の中が認識したのである。

### 第二節 国籍法の改正

---

<sup>8</sup>ヘルムート・ヨーゼフ・ミヒャエル・コール (Helmut Josef Michael Kohl, 1930年4月3日-) は(西)ドイツの政治家。1982年から1998年まで連邦首相(Bundeskanzler Deutschland)を務めた。

<sup>9</sup>石川真作『ドイツ在住トルコ系移民の文化と地域社会 -社会的統合に関する文化人類学的研究-』立教大学出版会、2012年 p.41-43

統一首相コールが率いるキリスト教民主同盟(Christlich-Demokratische Union Deutschlands、略称:CDU)・社会同盟(Deutsche Soziale Union、通称:DSU)と自由民主党(Freie Demokratische Partei 通称:FDP)連立内閣は、1998年、16年間に及ぶ政権に幕を閉じ、社会民主党(Sozialdemokratische Partei Deutschlands 通称:SPD)と緑の党(Die Grünen)による連立政権が誕生<sup>10</sup>した。この背景には、90年代後半に唱えられた「並行社会」<sup>11</sup>に対する不安が挙げられる。

第2・3世代における移民の若者がこのような不安定な状況下で、十分な教育を受けずに成長し、一部は義務教育さえ終了していないために学歴と資格に重きが置かれるドイツ社会において深刻な雇用不安にさらされる状況が起きている。また、ドイツ社会が移民の存在を容認しなかったがために、特にムスリム移民のためのインフラが整備されず、自らの閉鎖的なコミュニティの形成が進んだことも挙げられる。

政権交代が契機となり、シュレーダー連邦首相<sup>12</sup>率いる新政権は、事実上移民国家であるドイツの現状を踏まえ、国籍法の改正に踏み切った<sup>13</sup>。1913年に制定された国籍法は、子どもの生まれた場所がどの国であろうとも父または母の国籍を与えるという血統主義が制定されていた。しかし、移民第2・3世代の統合には帰化の容易化だけでは限界があり、ドイツ社会の一員である限り、彼らをより早い段階からドイツ人の一員として認識させる必要があるとの議論が上がり、出生地主義を一部で認めるといった国籍法の改正に至ったのである。その条件としては①ドイツ国内で出生していること②両親のうち一方が最低8年間合法的にドイツに定住していること③その親が滞在権または最低3年間無期限滞在許可を保持していること、の3つが挙げられた。幼児における二重国籍の保有も可能ではあるが、満23才までにいずれか一方の国籍を選択しなければならない。いずれにせよ、完全血統主義であったドイツが国籍法を改正し、条件付きで出生地主義を容認したことが、「外国人」を「ドイツ人の一員」として見なすための大きな一歩に繋がった。

---

<sup>10</sup> 同上、p. 43-46

<sup>11</sup> 「並行社会」とは、統合されざる移民によって、全体社会と交わることのない独自の社会が形成されるという状況を批判的に表現した概念である。石川真作『ドイツ在住トルコ系移民の文化と地域社会—社会的統合に関する文化人類学的研究—』立教大学出版会、2012年 p. 60より引用。

<sup>12</sup> ゲアハルト・フリッツ・クルト・シュレーダー(Gerhard Fritz Kurt Schröder, 1944年4月7日-)は、ドイツ連邦共和国の政治家。第7代連邦首相(1998年 - 2005年)を務める。

<sup>13</sup> 鈴木規子『EU市民権と市民意識の動態』慶應義塾大学出版会、2007年、p. 59-64

### 第三節 外国人法の改正

国籍法の改正に伴い、外国人法に定められていた帰化要件も緩和<sup>14</sup>された。従来、帰化するために必要とされていた滞在年数を15年から8年に短縮したのである。政府は、帰化要件を緩和することによって、最低55万人ほどの申請者が名乗りを上げると見込んでいたが、実際はそれを遥かに下回った。その理由としては、申請手数料が100マルク<sup>15</sup>から500マルクに値上げされ、新たに追加されたドイツ語能力試験の存在が挙げられる。後者のドイツ語能力試験については、外国人がドイツ国籍を取得することに不安を抱いていた当時のシリー連邦内相が、「民主主義」と「ドイツ語」がドイツで共存していくのに不可欠であると考え、打ち出されたものである。ここで問題として挙げたいことは、ドイツ語能力試験は統一されたものではなく、州によって異なるということである。ある州では新聞読解が課せられ、ある州では履歴書作成の可否で判断される。地方分権を是とするドイツの表れであるが、これらが外国人の不安を煽り、帰化申請の躊躇いに繋がったと予想することができる。そのため、言語習得をどのような政策として打ち出していくかということが議論の的となった。

## 第三章 トルコ人の海外進出

### 第一節 トルコ政府の期待

トルコ人のドイツ進出の門戸が開かれたのは、1961年のドイツ側の提案による協定の締結であった。ドイツが外国人労働者の受け入れに積極的であっただけではなく、トルコ側にとっても非常に良い機会<sup>16</sup>であった。1950年代に地方から都市部への人口集中が起こり、都市部での失業率が増加したのである。また、人口増加が激しく、労働力余剰も懸念されていた。これらを緩和するために、政府は国民の海外進出を促したのである。他にも思惑はあり、トルコ人は真面目で懸命に仕事をこなすというイメージをヨーロッパ人に植え付け、過去のトルコに対する否定的な考えをなくそうとしたのも1つの理由である。また、ヨーロッパへ出稼ぎに行くことにより、仕事のノウハウを学び、自国に戻った際に、国に貢献するような人間になることが期待されていた。以上の点から、

<sup>14</sup>内藤正典+一橋大学社会地理学ゼミナール『ドイツ再統一とトルコ人移民労働者』明石書店、1993年、p. 46-50

<sup>15</sup> 1948年6月20日から1998年12月31日までの期間に旧西ドイツで使用されていた貨幣単位DM(Deutsche Mark)である。

<sup>16</sup> 野中恵子 p. 21-22

トルコ政府はトルコ人の海外進出を促進していたのである。

## 第二節 トルコ労働者の期待

トルコ国内の経済は不安定、また失業率も高い中で、満足のできる生活を送れる人はそう多くはなかった。トルコで職を探すよりも、ドイツで仕事をしたほうが圧倒的に快適な生活を送ることが可能であった。トルコの都市部では人が溢れ、職がない。そんなところへ行くよりも、ドイツといった大国に出稼ぎにいったほうが確実に儲かるのである。二国間協定の影響もあり、受入れが制限されるまで多くのトルコ人が労働者として渡独したのである<sup>17</sup>。ドイツ人にとっては安い賃金だが、トルコ人にとっては貯金もでき、何不自由なく生活できるようになる、と良い噂ばかり流れ、トルコ人のドイツへの出稼ぎに拍車がかかった。また、はじめは一時的に労働者として来たつもりだったトルコ人だったが、ドイツに残り続けるものも多くなった。トルコよりも賃金がよく、社会保障制度も充実しており、かつトルコ街も存在する。移住するにあたり、宗教や言語の違いが障害になることがあるが、ドイツでは「トルコ人ゲットー(türkische ghetto)」<sup>18</sup>と呼ばれる、トルコ人街が多くあり、そこにはモスクが存在する。また、コーラン学校に通う子供も多く、ドイツに居ながらトルコ人として生活することができるのである。言い換えると、それほどトルコ人がドイツに多いという証明にもなるであろう。ドイツでトルコ人にとって高い賃金が手に入り、また、トルコ人としての自覚をもったまま生活することができる。そんな理想の生活を送ることをトルコ人は望み、ドイツへ出稼ぎに行く者が増加したのである。

## 第三節 ドイツから見たトルコ人の魅力

現在もドイツにトルコ人労働者が多く存在する理由として、ドイツ側がトルコ人を好んだということも挙げられる。トルコ人は他のヨーロッパ出身者と比較し、働くと言うことに対して非常に熱心で真面目であり、几帳面であると評判が高かった。そのようなトルコ人が、ドイツ人の嫌う3K<sup>19</sup>の仕事を手頃な賃金で引き受けてくれる。ある時、1人

---

<sup>17</sup> 野中恵子 p. 22-24

<sup>18</sup> 内藤正典『ヨーロッパとイスラーム -共生は可能か-』岩波新書、2004年、p. 28-29

<sup>19</sup> 3Kとは、職場環境がきつい(Kitsui)・汚い(Kitanai)・危険(Kiken)の頭文字を取って作られた造語である。

のジャーナリスト<sup>20</sup>がトルコ人に変装して、彼らがどのような仕事をしているのか潜入調査したところ、放射能被爆の恐れがある所や危険きわまりない職場が多かったと述べた。最も多いのはトルコ人であり、次いでユーゴ人、スロバキア人、イタリア人、ギリシア人などが危険な場所での仕事をこなしていた。使用者側からすれば、危険で、汚く、きつい仕事をしてくれる外国人は恰好の労働者であると言えよう。

## 第四章 トルコ人移民の問題点

### 第一節 同化しないムスリム

ベルリンにクロイツベルク (Kreuzberg) という地区がある。そこはトルコ系移民が集中する地区であり、3分の1以上のトルコ系が住んでいる。1960年代、外国人労働者としてやってきたトルコ人は、快適な生活よりも、貯蓄と母国への送金に一生懸命であった。そのため、家賃の安い低所得層が多く暮らす地区に拠点を置いたのである<sup>21</sup>。住宅街のアパートの窓を見ると、パラボラ・アンテナが設置されみな同じ方角を差しており、それが意味するのはトルコからの衛星放送を受信しているということである。ドイツでは、トルコ本土で放送するチャンネルをほとんど視聴することができ、トルコ語放送を視聴する人がここ10年で急激に増加した。その結果、その地に産まれた移民の2世や3世がドイツ語に触れる機会はまずなくなり、ドイツに居るにも関わらず、ドイツ語を話すことができない子供が多く存在する。また、モスクやコーラン学校も設立され、ドイツ語を全く身に付けずにドイツに滞在することが可能となった。それが、トルコ人のドイツへの適合を妨げている一因であるという考えもある。

### 第二節 犯罪の増加

旧西ドイツでは外国人犯罪率が非常に高かった<sup>22</sup>。1989年逮捕または検挙されたトルコ人は80,251人で、外国人の中で23.9%を占め、二位のユーゴスラビアの約二倍であった。また、14～21歳の少年の逮捕または検挙者にいたっては70%が外国人で、うち90%がトルコ人である。犯罪の多くは麻薬であり、ハンブルクでの麻薬の相場は、1987～89年の2年間で3分の1から5分の1まで急激に下がったことから理解できよう。

<sup>20</sup> 早川東三、工藤幹巳『ドイツを知るための60章』明石書店、2001年、p.125-127

<sup>21</sup> 内藤正典 p.26-37

<sup>22</sup> 野中恵子 p.65-66

トルコ人における少年犯罪増加の原因は、家庭環境にあるようだ。両親はお金を稼ぐのに精一杯であり、子供の面倒を見ている余裕がないのである。親が子供の幼少期に愛情を注いで育てなければ、子供は親の目を引くために犯罪に手を染めてしまう。犯罪は本人だけの問題にとどまらず、親の問題でもあることをトルコ人は自覚しなければならない。

### 第三節 リュトリ基幹学校

2006年3月、ベルリン州ノイケルン区にあるリュトリ基幹学校(Rütli-Hauptschule)の教師全員から、ベルリン州教育相に手紙が届いた<sup>23</sup>。「私たちにはどうしたらよいか分からない」と記されていた。基幹学校はそもそも教育水準の低い学校であり、生徒の質は大学進学を目指したギムナジウム(Gymnasium)<sup>24</sup>とは異なる。さらに、ノイケルン区はベルリンの壁に沿って位置していたため、戦後の労働不足を補うためにトルコ人が多く流出した結果、ノイケルンの住民の半数以上がトルコ移民となり、ドイツ語を話すことのできないトルコ人が多く存在する街となった。そんな基幹学校で、ゴミ箱をボール代わりにしてサッカーをしたり、女子生徒が手をナイフで突き刺されたり、髪の毛に火をつけられたり、ドイツ人がトルコ人にいじめられたりといった問題が起きたのである。教師も例外ではなくいじめの対象となり、教室に行くときはいつでも通報できるようにと、携帯電話を常に持ち歩いていたほどである。この手紙がきっかけとなり、教育関係者や政治家の間でさらに移民問題が注目されるようになった。

## 第五章 ドイツにおけるイスラム排斥

### 第一節 ドイツ国内におけるイスラムへの見方

2010年10月、与党キリスト教民主同盟(CDU)の青年部会議で、メルケル首相は „Der Ansatz für Multikulti ist gescheitert, absolut gescheitert!“<sup>25</sup>と述べ、欧米で波

---

<sup>23</sup> 伊東直美「ドイツにおける統合政策―帰化テスト(Einbürgerungstest)の統一基準をめぐる議論から―」より引用 [http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es\\_7\\_Ito.pdf](http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es_7_Ito.pdf) (最終閲覧:2014年1月15日)

<sup>24</sup> 4学年修了後(州によっては6年)、基幹学校(Hauptschule)・実科学校(Realschule)・ギムナジウム(Gymnasium)・総合学校(Gesamtschule)の4つに進路が分かれる。第五章第一節を参照。

<sup>25</sup> 訳「ドイツの多文化主義は完全に失敗した」DW.de ”Chancellor Merkel says German multiculturalism has 'utterly failed'” 2010 筆者翻訳。

紋を呼んだ。従来、ドイツは移民国ではないと否定し続けてきたが、移民増加に伴い、血統主義から出生地主義を一部に容認するよう変更<sup>26</sup>し、帰化要件は緩和され、長期滞在する外国人もしくは移民を「外国人」としてではなく「移民」として認識されることとなったのである。

こういった背景には、ドイツ国内には移民、特にトルコ移民が多く生活し、キリスト教が大半を占めるドイツ人にとってイスラム教徒を受け入れることに大きな抵抗があることが伺える。

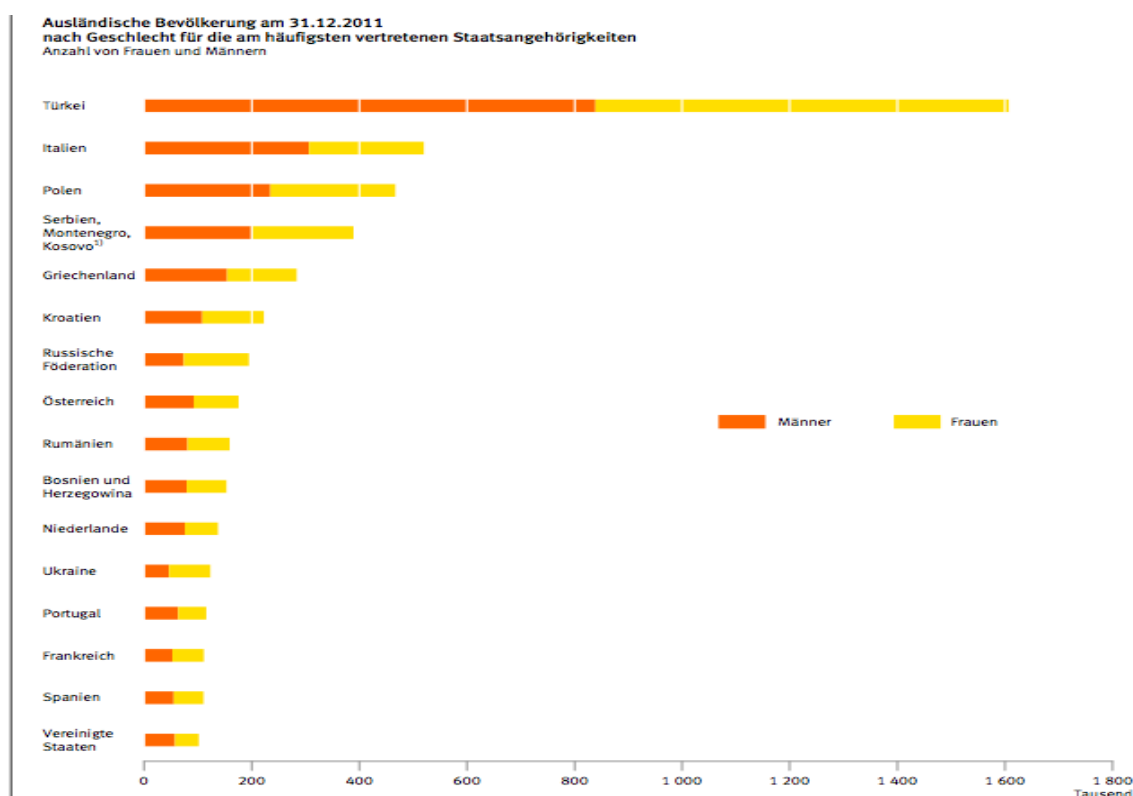


図 1 2011 年 12 月 31 日時点でのドイツにおける外国人人口<sup>27</sup>

イスラム教に対して不信感を募らせた要因として、同時多発テロが考えられる。多く

<http://www.dw.de/chancellor-merkel-says-german-multiculturalism-has-utterly-failed/a-6118859-1> (最終閲覧日: 2014 年 1 月 15 日)

<sup>26</sup> 宮島喬「一にして多のヨーロッパ 統合のゆくえを問う」勁草書房、2010 年 p. 198-209

<sup>27</sup> Statistisches Bundesamt “Bevölkerung und Erwerbstätigkeit -Ausländische Bevölkerung Ergebnisse des Ausländerzentralregisters- “2011 より抜粋 [https://www.destatis.de/DE/Publikationen/Thematisch/Bevoelkerung/MigrationIntegration/AuslaendBevoelkerung2010200117004.pdf?\\_\\_blob=publicationFile](https://www.destatis.de/DE/Publikationen/Thematisch/Bevoelkerung/MigrationIntegration/AuslaendBevoelkerung2010200117004.pdf?__blob=publicationFile) (最終閲覧日: 2014 年 1 月 15 日)



の被害もしくは被害者を出したテロ事件を恐れる者が増加し、イスラム教徒が多く生活するドイツ国内でもイスラム教徒に対する見方が変化してきたのである。そこで、世の中の風潮としてイスラム排斥の動きが見られるようになったのである。

2009年10月のLettre International誌でのインタビュー<sup>28</sup>で、元ドイツ連邦銀行の理事、ティロ・ザラツィン(Thilo Sarrazin)は、アラブ人とトルコ人に対して批判的な意見を述べたことが注目を浴びた。

*Eine großes Zahl an Arabern und Türken in dieser Stadt, deren Anzahl durch falsche Politik zugenommen hat, hat keine produktive Funktion, außer für den Obst- und Gemüsehandel, und es wird sich vermutlich auch keine Perspektive entwickeln.*<sup>29</sup>

また、2010年12月に出版されたタイトル“Deutschland schafft sich ab”<sup>30</sup>(ドイツが消える)では、ドイツ国内に多く存在するイスラム教の移民増加が原因で、いずれドイツは滅亡するといった過激な内容を記した。ザラツィン氏の今までの過激な発言が人種差別にあたるとされ、理事を解任された。しかし、ドイツのテレビ局N24 Medien GmbHが視聴者対象に行った調査<sup>31</sup>によると、51%がザラツィン氏の解任に反対していることが分かり、彼を支持するメッセージも多数党あてに寄せられていることも明らかになった。

ザラツィン氏の一連の報道から分かるように、ドイツ国内ではイスラム教徒に対して嫌悪感を抱いているドイツ人の割合は少なくはないということが言えよう。

---

<sup>28</sup> Frank Berberich “KLASSE STATT MASSE “, Lettre International, 2009, Heft 86, S197-201より引用。

[http://www.pi-news.net/wp/uploads/2009/10/sarrazin\\_interview1.pdf](http://www.pi-news.net/wp/uploads/2009/10/sarrazin_interview1.pdf) (最終閲覧日: 2014年1月15日)

<sup>29</sup> 筆者翻訳「謝った政策によって増加した、この街(ベルリン)にいるアラブ人とトルコ人の大半が、全く生産的な昨日を果たさない—果物や野菜の商売以外は。そして彼らには、おそらく見込みは全くないでしょう。」

<sup>30</sup> Thilo Sarrazin, *Deutschland schafft sich ab*, Dva Dt. Verlags-Anstalt, 2010

<sup>31</sup> AFP BBNews、「人種差別発言でドイツ中銀理事解任へ、タブーに踏み込んだとの評価も」、2010年 <http://www.afpbb.com/articles/-/2753050?pid=6139853> (最終閲覧日: 2014年1月15日)

## 第二節 ケルンでのモスク建設を巡る論争

世界遺産に登録されているゴシック様式の大聖堂で知られるケルン (Köln) で、2007年8月にドイツ最大のモスク建設計画が浮上し、ナチスの迫害を受けたユダヤ人作家として有名なラルフ・ジョルダノ氏 (Ralph Giordano) の発言が注目を浴びた。ジョルダノ氏はトルコ系宗教家との対談で、*“Stoppt den Bau dieser Moschee! Es ist ein falsches Signal (巨大モスクの建設を認めれば、イスラム社会とドイツの融和が進んだという誤ったシグナルを与えることになる)”*<sup>32</sup>との持論を展開したのである。

ルール工業地帯近郊のケルンでは、約12万人のトルコ移民が生活している。ケルンにトルコ移民が多い背景としては、戦後復興のために3Kといった仕事を任せるために連れてこられた出稼ぎ労働者が多いためである。かつては間に合わせの場所として、工場やアパートの一室を礼拝堂として利用され、周辺に暮らすドイツ人の目にはあまり触れられることがなかった。しかし、出稼ぎ労働者が家族を引き連れ、長期滞在するようになると、スペースが足りなくなり礼拝堂が必要となったのである。それから徐々にドイツ各地でモスクが作られるようになり、2007年にはケルンに巨大モスクを建設する計画が浮上したのである。

国内外からのモスク建設の可否議論が行われた際、2007年6月中旬に地元紙『ケルナー・シュタットアンツァイガー』(Kölner Stadt Anzeiger)が世論調査機関オムニクエスト (OmniQuest) に委託し、ケルン市民に対して世論調査を行った。「エーレンフェルト (Ehrenfeld) トで計画中の DiTiB (Diyanet İşleri Türk İslam Birliği, ドイツ語: Türkisch-Islamische Union der Anstalt für Religion) の中央モスクの新設をあなたは支持しますか」という設問で、「支持する」が35.6%、「支持するが計画通りの規模では反対」が27.1%、「支持しない」が31.4%であり、市民の意見が真っ二つに分かれた<sup>33</sup>。モスク建設地のエーレンフェルトというトルコ人街で調査が行われたため、ドイツ人とトルコ人で意見が分かれたことが想像できる。モスクという言葉がドイツ人が聞くと、本当に信仰だけをしているのか、それとも何かひそひそ話をしているのではないか、という不安感からこういった結果になったのである。

結論としては、2009年11月にケルンのモスク (DITIB-Zentralmoschee Köln) は完成し、元々2000人収容することができる予定であったが、規模が縮小され、1200人収容

<sup>32</sup> Johannes Nitschmann, *Kulturkampf in Köln*, Berliner Zeitung, 2007より引用。

<sup>33</sup> 近藤潤三、「現代ドイツのモスク建設をめぐる紛争 -ケルンにおける政治過程-」 p.114-115 <http://repository.aichi-edu.ac.jp/dspace/bitstream/10424/1398/1/shakai4797138.pdf> (最終閲覧日: 2014年1月16日)

に変更となった。人口の大半がキリスト教徒である自国にモスクを建設することで、イスラム教徒の信仰がより深いものとなることを恐れてデモが起きたことから、ドイツ人とトルコ人の間で摩擦が未だにあることが分かる。

## 第六章 ドイツ国内における意見の相違

### 第一節 ドイツ語の必要性

言語習得が移民における社会統合への必要条件であることは、オットー・シリー元連邦内相 (Otto Georg Schily) のみならずアンゲラ・メルケル (Angela Dorothea Merkel) 首相も言及している。2010年10月17日にポツダム (Potsdam) で行われたキリスト教民主同盟 (CDU) 青年部会で、党首メルケルは “German multiculturalism has ‘utterly failed’ (ドイツで多文化社会を築くことは失敗であった)”、その原因を “Those who want to take part [in our society] must not only obey our laws, they must also master our language, (私たちの社会に参加したい人は、法に遵守だけでなく私たちの言語を習得しなければならない)” と述べ<sup>34</sup>、労働市場で競争していくには移民が言語を習得していかなければならないことを強調した。また、トルコのアブドゥラー・ギェル (Abdullah Gül) 大統領は、ドイツに住むトルコ人が流暢な訛りのないドイツ語を話せるよう学習すべきだと、南ドイツ新聞紙 (Süddeutsche Zeitung) に語った。このように彼らが言語習得の必要性を促すのは、ドイツで生きていく上で避けられない教育の制度にある。

ドイツの教育制度は、職業資格に重点をおくシステムを採用しており、6才からの4年間は基礎学校で学習した後、主に3つのコースのいずれかを選択する。(図2参照)

---

<sup>34</sup> Sean Sinico and Martin Kuebler, “Chancellor Merkel says German multiculturalism has ‘utterly failed’”, DW Akademie, 2010  
<http://www.dw.de/chancellor-merkel-says-german-multiculturalism-has-utterly-failed/a-6118859-1> (最終閲覧日: 2014年1月16日) より引用。

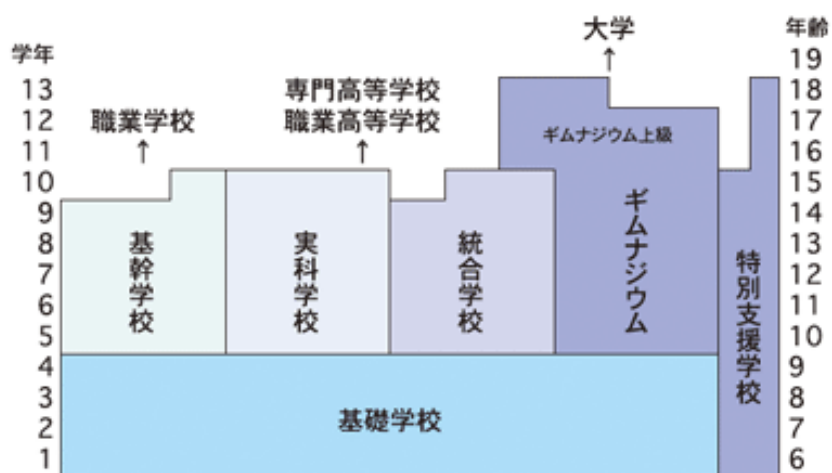


図 2 ドイツにおける学校制度<sup>35</sup>

①基幹学校(Hauptschule) (5年または6年制) から職業訓練コースに進む②実科学校(Realschule) (6年制) から職業専門学校または上級専門学校に進む③ギムナジウム(Gymnasium) (9年制) で大学入学資格(Abitur) 取得後、大学進学。つまり、ドイツでは日本の小学4年生に相当する幼いうちに、将来を見据えて自分の進路を両親や先生と相談しながら決めなければならない。その際、判断基準となるのが学校の成績である。ここで優秀な成績をおさめているものから、ギムナジウム・実科学校・基幹学校の順に決まる。外国人生徒の就学・進学状況は、ドイツ人の子どもに比べ相対的にレベルの低い傾向にある。(図3参照)この原因としては、家庭内では常に両親の話す言語を使用するため、流暢なドイツ語を身につける子どもが少ないためである。

また、外国人の失業率も高く、ドイツ国内全体の失業率と比較すると2倍にのぼる。<sup>36</sup>主に製造業や炭鉱業に携わってきたガストアルバイターは言語を必要とせず、さらに学習する機会にも恵まれなかったことから再就職が困難なことが考えられる。ドイツの教育制度上、子どもの進学に関して親の意見も重要となるため、このことが第2・3世の教育や就職にも影響を与えている。

以上のように、ドイツで生活をしていくためにはドイツ語が必須となり、移民にも言語習得をさせるための機会を政府は提供している。それが上記に挙げた統合コース(Integrationskurs)である。この制度は第7章第1節で詳しく述べる。

<sup>35</sup> Doitsu News Digest、「難航する学校改革」より抜粋。

<http://www.newsdigest.de/newsde/news/featured/2945-831.html> (最終閲覧日: 2014年1月16日)

<sup>36</sup> 岡本奈穂子 No. 32、p. 19

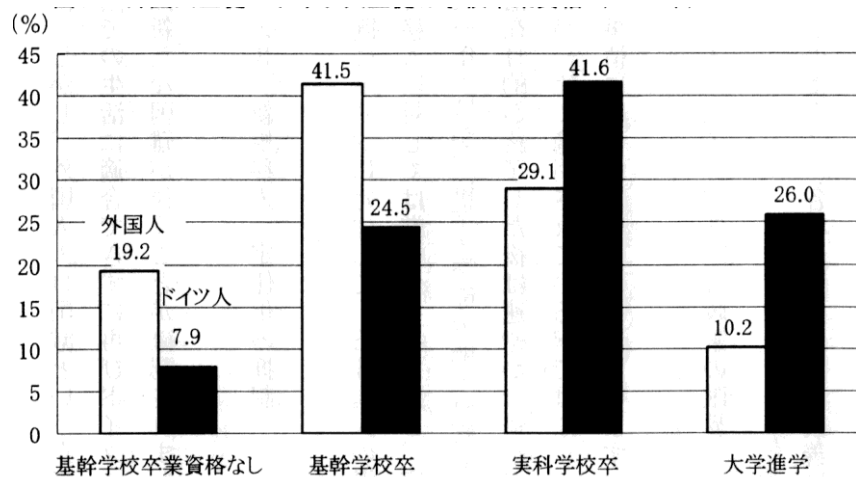


図 3 外国人生徒・ドイツ人生徒の学校卒業資格(2003年)<sup>37</sup>

## 第二節 国民の意識

元ドイツ連邦銀行理事ティロ・ザラツィン氏が2010年12月に執筆した「ドイツが消える」 („Deutschland schafft sich ab“)が、世論を二分にする激しい議論を呼んでいる。彼の書では、イスラーム教の移民増加が理由でいずれはドイツが滅亡するといった過激な内容を記したものである。本書以外でも2009年10月に、「コソボ人がコソボを制服したのとまさに同じように、トルコ系住民は高い出生率を武器にドイツを征服しようとしている」「アラブ人とトルコ人はこの街(ベルリン)で、果物と野菜を売る以外の生産的な活動をしていない」<sup>38</sup>などと発言して世を騒がせ、ドイツ連邦議員の理事解任を求める騒動まで起こった。

しかし、ニューステレビ局N-24が視聴者対象に行った調査より、51%がザラツィン氏の解任に反対していることが分かった。<sup>39</sup>また、ザラツィン氏を支持するメッセージも多数、党あてに寄せられていることも明らかになった。ドイツ国籍を持たない若者の5人に1人が学校を中退し、ドイツ社会に適応しようとする姿勢が見受けられない。反移民感情の高まりも見られ、BBC(British Broadcasting Corporation)Newsによると、30%のドイツ国民が自分の国が「外国人によって制圧されている」と感じている結果

<sup>37</sup> 同上、p. 18 引用

<sup>38</sup> AFPBBNews、「人種差別発言でドイツ中銀理事解任へ、タブーに踏み込んだとの評価も」、2010年より引用。

<http://www.afpbb.com/articles/-/2753050?pid=6139853> (最終閲覧日: 2014年1月16日)

<sup>39</sup> 同上

が出た。<sup>40</sup>その理由として、外国人がドイツの税金で生活し、治安を悪化させているといった偏見を持っている人がいるためである。実際、ガストアルバイターは不況で真っ先に解雇されるため失業率が高くなる傾向にあり、トルコ人の26%に相当する約44万人が生活保護を受けている。ドイツ人の8%、外国人全体の19%と比較すると高い数字であることは明らかである。ドイツ国内でも外国人受け入れに未だ賛否両論があるのであり、一概にドイツ国民の意見を述べることは困難である。

以上のように、ドイツで生きていく上でドイツ語習得は欠かせないものであり、政府はドイツ語能力が不十分である外国人に対して政策を行い、外国人もしくは移民の積極的な社会統合を推進してきた。しかし、実際には外国人の受け入れに対して反対の姿勢を保っている国民も少なくない。政府と国民で受け入れに対する考え方の違いが存在する限り、ドイツにおける移民との統合は困難なものであることは想像できよう。

## 第七章 統合コースとは

### 第一節 概要

統合コース(Integrationskurs)とは、2005年1月1日に発効したドイツ新移民法(Zuwanderungsgesetz)による、長期滞在する外国人・移民のドイツ社会への統合強化対策である。このコースは2つの柱から成り立ち、①語学コース(Sprachkurs)②オリエンテーションコース(Orientierungskurs)に分かれる<sup>41</sup>。ドイツで自立して生活していくために必要なドイツ語能力を身につける語学コースは600時間の学習時間を設けられている。欧州議会が定めた「欧州言語を対象とする共通の語学力基準」(Gemeinsamer Europäischer Referenzrahmen)のB1水準に相当する「十分な語学能力」を習得することが目的である。生活する上で欠かせないドイツの習慣や価値観のみならず、ドイツの歴史や法秩序を学ぶオリエンテーションコースの学習時間は60時間であり、ドイツの法秩序、歴史、文化に関する基本的知識の習得を目指す。

---

<sup>40</sup> BBCNEWS EUROPE „Merkel says German multicultural society has failed“ 2010 参考。筆者翻訳。

<http://www.bbc.co.uk/news/world-europe-11559451> (最終閲覧日: 2014年1月16日)

<sup>41</sup> Bundesamt für Migration und Flüchtlinge 通称: BAMF „Integrationskurs -Was ist das?“ <http://www.bamf.de/DE/Willkommen/DeutschLernen/Integrationskurse/integrationskurse-node.html> (最終閲覧日: 2014年1月16日)

能力	水準	概要
応用	C2	全て苦労なく理解することができ、とても流暢に正確に表現できる。
	C1	難解な文章を理解でき、有効かつ社交的に話すことができる。
基本	B2	主要な内容を理解でき、明確かつ詳細に話すことができる。
	B1	要点が理解でき、簡単かつ理路整然と話すことができる。
初歩	A2	文章や頻度の高い表現を理解でき、画一的な場面での意思疎通が可能である。
	A1	非常に簡単な文章を理解し、簡単な方法での意思疎通が可能である。

表 1 「欧州言語を対象とする共通の語学力基準」  
(Gemeinsamer Europäischer Referenzrahmen)<sup>42</sup>

コースの受講対象者は大きく 3 つに分かれ、①既に長期的にドイツに滞在している外国人 (Bestandsausländer) ②2005 年 1 月 1 日以降初めて 1 年以上の滞在許可を取得した、新規にドイツに移住してきた外国人 (Neuzuwandernde Ausländer) ③後期帰還移住者 (Spätaussiedler) となる。対象者のほとんどが①②に該当する。ドイツ語を話す事のできない新規外国人は統合コースの受講を義務化し、外国人局に在留許可を申請した際に、統合コースの受講を義務づけるようになっている。長期滞在外国人は、在留許可更新時に係官との会話を通じて評価され、ドイツ語能力次第で統合コースの受講を勧められるが、参加の義務はない。

## 第二節 構成の変化

統合コースはドイツにおける長期滞在を希望する外国人もしくは移民に対して参加を促すものであり、年々学習時間や授業で扱われるテーマが変化している<sup>43</sup>。統合コースが初めて実施された年には、語学コースは 600 時間と現在と変化はなかったが、オリエンテーションコースは 30 時間となっていた。しかし、途中で 15 時間延長されて 45 時間になり、現在では 60 時間と、当初より倍の学習時間が設けられるようになった。この背景には、上記に述べたドイツ国内でのイスラムに対する危機感や嫌悪感から、ト

<sup>42</sup>三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング「英独仏における外国人問題への取り組み及びその課題に関する調査研究報告書」2007、p. 40 より引用。

<sup>43</sup> 前田直子『移民向け統合コースに関する一考察 -オリエンテーションコースに参加して-』p. 2-3  
[http://ci.nii.ac.jp/els/110009492100.pdf?id=ART0009960572&type=pdf&lang=jp&host=cini&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1389845149&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110009492100.pdf?id=ART0009960572&type=pdf&lang=jp&host=cini&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1389845149&cp=) (最終閲覧日: 2014 年 1 月 16 日)

ルコ移民をドイツ社会へより統合するように政策を行わなければならないと考えたためである。2010年10月、メルケル首相の“German multicultural society has failed (多文化主義は完全に失敗した)”<sup>44</sup>との発言からも、ドイツ国内ではよりトルコ移民への対応が厳しくなっていたのである。

2つのコースで取り扱われるテーマを見ても、ドイツで生きていくために必要なシチュエーションを取り入れた学習となっていることが理解できる<sup>45</sup>。語学コースでは、買い物/商売/消費・住居・健康と保健/人間の体・仕事と職業・専門教育と継続教育・子どもの世話と教育・余暇と社会的な繋がり・メディアとメディア利用がテーマとして挙げられている。オリエンテーションコースでは、ドイツの法秩序や歴史、文化のみならず、ドイツにおける権利と義務・社会における共同形成・ドイツで重要とされる価値(例:宗教の自由、平等)をテーマとして学習されている。

### 第三節 統合の失敗

2005年から実施されている統合コースは、今年で8年目を迎える。毎年コースの改善は行われているが、その背景には統合が失敗したと社会で騒がれていたことが原因として考えられる。

一見、移民の社会統合を行うのに最も適した方法であるように見えた統合コースだが、不参加者や途中辞退する者が後を絶たず、開始直後に失敗がメディアで騒がれた。<sup>46</sup>2005年に約6万人の新規来独した外国人に参加が義務づけられていたが、そのうち半数が不参加で、2006年両年の総参加者数のうち約30%しかこのコースを修了していない。統合コース提供機関 Rambøll Management が独自に、参加対象者にアンケートを行った<sup>47</sup>ところ、約70%の人々が妊娠や就業のために途中辞退や不参加に至ったという。39.1%の参加対象者はモチベーションの低下が原因であると回答している。「60歳過ぎの今

---

<sup>44</sup> BBC NEWS EUROPE „Merkel says German multicultural society has failed “ 2010より引用。  
<http://www.bbc.co.uk/news/world-europe-11559451> (最終閲覧日: 2014年1月16日)

<sup>45</sup> Bundesamt für Migration und Flüchtlinge ” Inhalt und Ablauf “  
<http://www.bamf.de/DE/Willkommen/DeutschLernen/Integrationskurse/InhaltAblauf/inhalt-ablauf-node.html> (最終閲覧日: 2014年1月16日)

<sup>46</sup> 小林薫『ドイツの移民政策における「統合の失敗」』  
[http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es\\_8\\_Kobayashi.pdf](http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es_8_Kobayashi.pdf) (最終閲覧日: 2014年1月16日)

<sup>47</sup> Bundesministerium des Innern, Evaluation der Integrationskurse nach dem Zuwanderungsgesetz, 2006, S. 52.  
[http://www.bmi.bund.de/SharedDocs/Downloads/DE/Veroeffentlichungen/evaluation\\_integrationskurse\\_de.pdf?\\_\\_blob=publicationFile](http://www.bmi.bund.de/SharedDocs/Downloads/DE/Veroeffentlichungen/evaluation_integrationskurse_de.pdf?__blob=publicationFile) (最終閲覧日: 2014年1月16日)



からドイツ語を学んでも仕方ない」、「時間の無駄」、「参加するように言われた上に有料の理由が分からない」といった意見も寄せられた。確かに妊娠や就職は参加を困難にするかもしれないが、時間の使い方では受講が可能であろう。参加が義務づけられているにも関わらずこのような状態になっているのは、新たにドイツ語を取得することの重要性を感じていない外国人が多数存在するためであるということは容易に想像できる。

メディアが連日「統合の失敗」を連想させる見出しを打ち出したことも、ドイツ国内で統合が成功しなかったという印象をドイツ国民に植え付けることとなった。

„Skepsis gegenüber Multikulti „ (多文化主義への疑念)<sup>48</sup>

„Multikulti ist gescheitert “ (多文化主義は失敗した)<sup>49</sup>

„Wer sich nicht integriert, muß Deutschland verlassen! “ (統合されない者はドイツを去れ!)<sup>50</sup>

以上に述べたように 2005 年開始時の統合コースは多くの問題を抱えたため、その後統合コースの内容が幾度と変更され、現在に至る。メディア報道では、多文化主義に関する記事が多く載せられ、社会の関心度がいかに高かったかということが分かる。

第七章までは移民受け入れの経緯から現状をめぐる問題点や統合コースの概要などを検証してきたが、第八章からは筆者が実際に行った参与観察について言及し、現場の生の声を吸収し、政策と現場の乖離を見出していく。

## 第八章 参与観察

観察対象とした統合コースは、ベルリン州ノイケルン地区の市民大学 (Volkshochschule)<sup>51</sup>で 2013 年 9 月 9 日に開講した語学コースと 2013 年 9 月 16 日に開講したオリエンテーションコースの 2 コースとなる。

---

<sup>48</sup> Frankfurter Allgemeine Zeitung, 4 März 2006, S.10.

<sup>49</sup> Der Tagesspiegel, 4. Dezember, 2006.

<sup>50</sup> Bild, 1. April, 2006.

<sup>51</sup> 市民大学 (Volkshochschule、通称 VHS) とは、各都市の地方自治体や職業組合によって運営される地域の「継続・生涯学習機関」で、日本の市民大学やカルチャー・スクールに相当する。元々の始まりは、19 世紀末にヨーロッパ各地で起こった大学拡充運動。それまでエリート層にのみ属するとされていた科学・学問の知識を一般市民にまで浸透させる狙いで、ドイツでは 1902 年に初めてベルリンの「赤の市庁舎」で開講した。

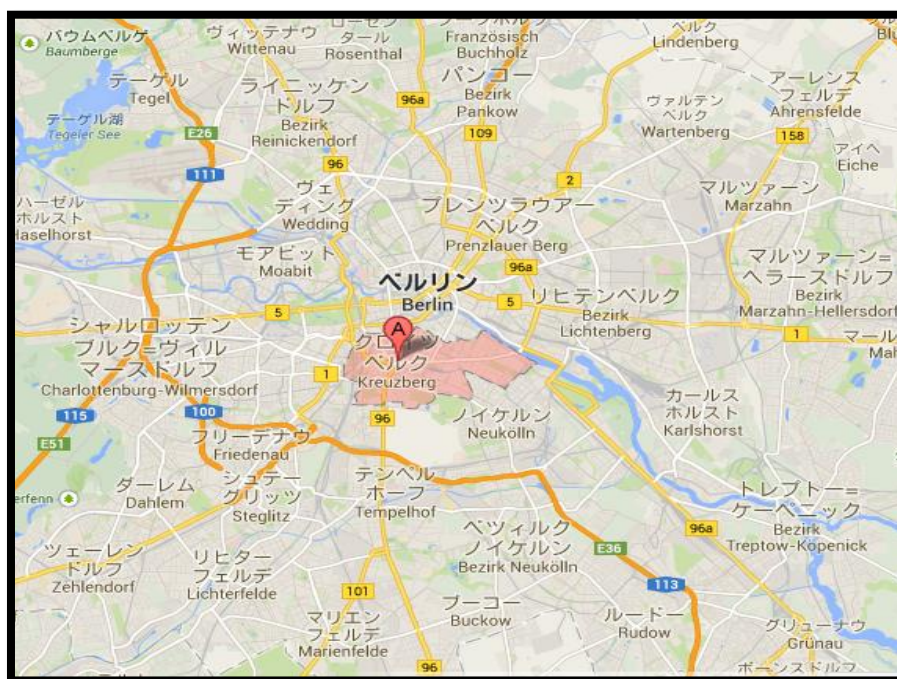


図 4 クロイツベルクの所在地(赤い部分)

ベルリン・ノイケルン市民大学の選定理由としては、移民だけでなく外国人が多く住み、多国籍の人々が共存している街であるためである。ノイケルンは図5参照で分かるように、旧東西ドイツの国境沿いに位置するため移民が多く、生活水準が他の地域と比較して低く治安もあまりよくない。近年は多文化主義が受け入れられ、ノイケルンが最先端の街として若者に人気となり、物価が年々高騰しているが、未だにトルコ人街が存在し影響力をもつ移民の街としても知られている。筆者が1年間ベルリン自由大学(Freie Universität Berlin)に交換留学をしていたために、現地に住む知り合いが多いということも選定理由の1つである。

## 第一節 統合コース

### 第一項 概要

統合コースは語学コースとオリエンテーションコースの二本の柱で構成されており、第一節では2013年9月9日～2013年9月13日まで参与観察した語学コースについて言及していく。

以下の表2は、筆者が参与観察対象としたコースの概要を示したものである：

学校名	Die Berliner Volkshochschulen Neukölln
所在地	Hauptlehrstätte, 12053 Berlin, Boddinstr. 34, Raum B1.42
コース名	ドイツ語レベルB1.1 (Deutsch Grundstufe B1.1., Modul 5)
教員	Arndt, Petra; Dr. Krause, Sabine; Kohlmann, Elke; Teller, Antje
費用	150ユーロ
実施期間	9月9日(月)～10月11日(金)(土日除)
授業時間	8時30分～12時35分(休憩30分間含む)
参与観察期間	9月9日(月)～9月13日(金)の5日間
受講人数	11名

表 2 参与観察対象「語学コース」の概要

言語レベルが B1.1<sup>52</sup>の学習者を参与観察対象とした理由は、まずアンケートの実施にあたり、日常会話をドイツ語で話せる受講者のほうが回答率が高いと感じたためである。B1 は欧州議会が定めた「要点が理解でき、簡単かつ理路整然と話すことができる」者であり、アンケート内容を理解でき、かつドイツ語での意思疎通も可能である点から、B1.1 のコースを選定した。

## 第二項 受講者の属性

初日の受講者は筆者を含まない 8 人で、出身国はそれぞれ、イタリア(3)、ポーランド(4)、シリア(1)(カッコ内は人数)であった。参加者リストには 12 人載っているようだが、4 人が欠席であった。しかし、翌々日(9月11日)からイタリア人(2)とスペイン人(1)が参加するようになった。つまり、1 人は登録を済ませているが受講を希望しない受講者であり、教員の話によると、その 1 人はトルコ人であったようだ。国籍はみな出身国と同様であった。

より詳しい受講者の属性を知るために、参与観察最終日の授業後に簡単なアンケートを実施した。アンケート実施日の出席者が 10 人であったため、回答数も 10 枚となった。その集計結果は以下の通りである。(表 3 参照)

<sup>52</sup> 第七章第一節で提示した表 1 を参照。B1 は B1.1 と B1.2 の 2 つのレベルに分かれ、B1.1 は A2 よりの B レベル、B1.2 は B2 よりの B レベル。

アンケート回答者:10名 (数字は人数を表す)

被験者	A	B	C	D	E
1) 性別	女性	女性	女性	男性	女性
2) 年齢	25歳	25歳	26歳	27歳	28歳
3) 職業	ウェイトレス	主婦	失業者	ビジネスブローカー	失業者
4) 国籍	イタリア	シリア	ポーランド	イタリア	イタリア
5) 配偶者の有無	無	有	有	無	無
6) 子どもの有無	無	なし(妊娠中)	無	無	無
7) 滞在期間	7ヶ月	7ヶ月	11ヶ月	4ヶ月	5ヶ月
8) 渡独理由	博士課程を取る	配偶者がドイツ在住	配偶者がベルリンで勉強中	仕事にドイツ語が重要	職探し
9) ベルリンへの移住理由	単にベルリンが好き	〃	〃	知り合いがベルリン在住	若者の街
10) 受講費用	自費	負担なし	自費	自費	自費
11) 家庭内の使用言語	英語・ドイツ語・イタリア語	アラビア語	ポーランド語・ドイツ語	英語・スペイン語・イタリア語	英語・ドイツ語
12) オリエンテーションコースの受講有無	有	有	無	有	有

被験者	F	G	H	I	J
1) 性別	女性	女性	男性	女性	男性
2) 年齢	32歳	33歳	37歳	40歳	45歳
3) 職業	失業者	失業者	写真家	販売員	失業者
4) 国籍	イタリア	ポーランド	スペイン	ポーランド	イタリア
5) 配偶者の有無	有	有	有	有	有(ドイツ人)
6) 子どもの有無	無	有(1人)	無	有(4人)	無
7) 滞在期間	3ヶ月	5年10ヶ月	6ヶ月	11年6ヶ月	9ヶ月
8) 渡独理由	職探し	職探し	職探し	配偶者の職がベルリンに有り	配偶者がドイツ人
9) ベルリンへの移住理由	〃	初めて来た街	大きな美術文化の街	〃	ドイツ語習得に適している
10) 受講費用	自費	自費	自費	自費	無
11) 家庭内の使用言語	イタリア語	ポーランド語	スペイン語・ドイツ語	ポーランド語	イタリア語
12) オリエンテーションコースの受講有無	有	有	有	有	有

表 3 語学コースのアンケート結果

受講者の年齢層は20代が最も多く、最年少が被験者Aと被験者Bの25歳で、最年長が被験者Jの45歳であった。渡独の理由に関しては、配偶者がドイツで仕事をしているため一緒に来たという者が4人で、彼らは職が探せるようにドイツ語学習に励んでいるというよりも、自分の自由な時間があるために、ドイツにいるからには語学学校に通おうと考えている者が多かった。そのため、家庭内で使用される言語は、ほとんどの受講者が母語を話していることが分かった。中には、仕事上や友人間でドイツ語や英語を話すものも居たが、全員普段から多く話す言語は母語であった。

市民大学に通う理由としては、他のプライベートな語学学校よりも費用が安いことが挙げられる。<sup>53</sup>職を求めて渡独した者は4名で、自国ではほとんどと言って良いほど仕

<sup>53</sup> オリエンテーションコースも受講すれば、負担額の半分が戻ってくるというシステムがあるため、語学コースを実質半額で受講することが可能である。受講者10名中9名がオリエンテーションコースの受講を希望。

事が見つからず、ドイツに来れば就職先を見つけることができると思い、来ている者も目立った。受講者の出身国を見ても分かるように、ヨーロッパ諸国内の経済状況が著しくない国々からの移住が多い。そのため、失業者がクラスに4名おり、就職のためにはまずドイツ語を習得する必要がある、受講している者がクラスの半数を占めていた。

滞在期間が最も長かったのは、子どもを4人抱えた被験者Iであった。彼女のポーランド人夫がベルリンで働いているために、同伴して来独したそうである。彼らの子どもはドイツで生まれ育っているため、完璧なドイツ語を話すそうだが、彼女自身は家庭内でポーランド語のみを話すため、2002年からドイツに住んでいるが、あまり流暢にドイツ語を話すことができないのが悩みであると話してくれた。ただ、彼女は店員として働いているため、子どもを育てながら働いている傍ら、市民大学に通っており、だからこそドイツ語学習のモチベーションが高いのであろうと考えられる。

アンケート回答に協力してくれた10名のうち、8名が非常に高い学習意欲があることが伺えた。職探しのためにドイツ語学習に励むという要因のみならず、クラスの雰囲気そのものが和やかであり、学習環境が整っていたことも考えられる。そもそも、このクラスはドイツ語初習レベルであるA1.1から継続して履修している者が、10名中8名いることから、このより高い段階であるB1.1レベルの授業が始まる以前からドイツ語を共に学習してきた仲間であった。初日の参与観察でも、授業開始以前から仲睦まじく話している姿を筆者が目にしており、すでに和やかな雰囲気が漂うクラスであったため、受講者も毎日市民大学に通うことを楽しみにしていたように思える。

特に、被験者Bに関しては、旦那と一緒に半年前にベルリンに移り住んできたが、友人はほぼベルリンにいないそうである。彼女が妊婦であることもあり、あまり家からは出る機会がなく、話す相手も配偶者か、あるいはお腹にいる赤ん坊への呼びかけしかない。職を探しているわけでもなく、ドイツ語を実際に必要としているわけではないが、このクラスに来ることで、日常生活に困らない程度のドイツ語を習得することができたり、自分と同じ境遇の受講者と話をしたりすることで、気分転換にもなるため、ほぼ毎回1番のりで授業に来るんだ、と述べていた。

彼女の話がこのクラスを象徴するように、いかに受講者同士が友好的な関係を築いていたかが分かる。クラスの雰囲気が良ければ良いほど、受講者のモチベーションにも繋がるのではないかと分析する。

### 第三項 教材

筆者が参与観察したノイケルン市民大学では、ドイツ連邦移民・難民庁(Bundesamt

für Migration und Flüchtlinge)が定めた10冊の教科書の中から、「Schritte plus」<sup>54</sup>という Hueber 社が発行しているドイツ語教材を使用していた。(図5参照)教材は受講者による負担で、コース開始前に自分で書店で購入する必要がある。授業初日の受講者、8名中2名が今回からの新規履修者であるが、両者ともすでに教材を入手しており、教員は念のためにコピーを取っていたようだがそれを配布する必要がなく、今回のクラスはそこからもモチベーションが高いことが伺えると担当教員が話していた。

副教材に関しては、教員が教科書のみでは足りないと考えた単元を、独自に探して授業で使用していた。



図 5 Schritte plus の表紙

本教材のシラバスは、以下の通りである<sup>55</sup>：

目次

1. Glück im Alltag (日常生活での幸せ)
2. Unterhaltung (娯楽)
3. Gesund bleiben (健康を維持する)
4. Sprachen (話す)
5. Eine Arbeit finden (職を探す)
6. Kundenwünsche (顧客の要望)
7. Rund ums Wohnen (居住の周り)

目次項目を見て分かるように、日常生活に必要な場面を想定して教科書が制定されていることがわかる。従来の日本語教育の教科書に見られるような、文法ごとに単元を分けて学習するよりも、場面シラバスを用い、実際に自分が生活をする上で必要不可欠なシーンを想像して学習していく方法が取られている。この形式はドイツ語圏で多用される手法である。ドイツ語学習を、文法や構文から習得するのではなく、実際の生活です

<sup>54</sup> „Schritte plus 5“ Hueber Verlag, München, 2010

<sup>55</sup> 同上 p. 4-5 より引用。筆者翻訳。

ぐさま使用できるように工夫が施されているのである。

#### 第四項 授業の進行

次に、本コースの授業進行について観察・調査をおこなった。以下の図6は、授業教室内の構図を図式化したものである。

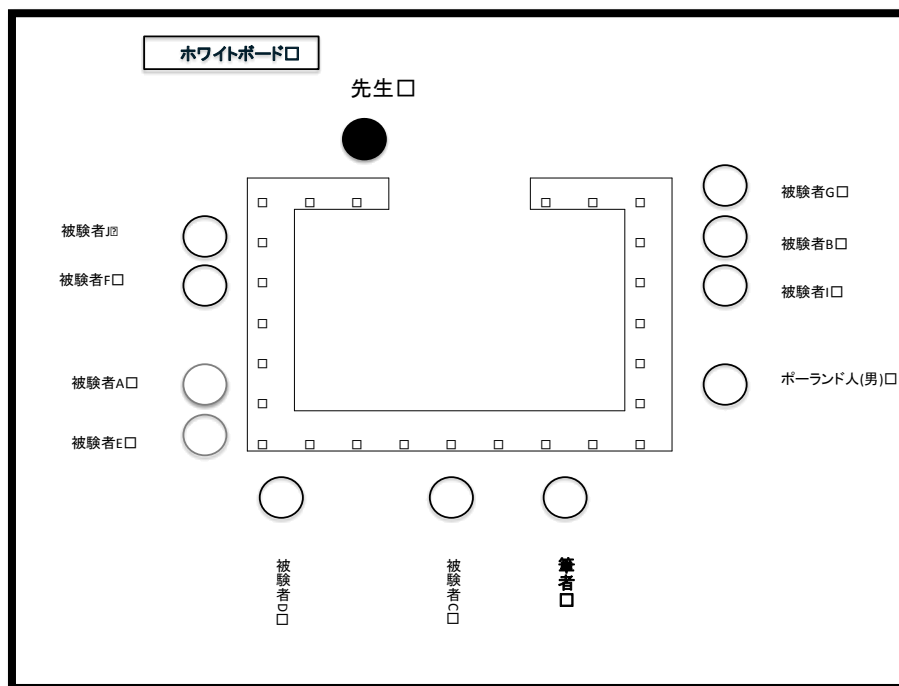


図 6 座席表(筆者作成)

以下に、時間的なプロセスに従って授業進行について説明する：

##### 【参与観察第1日目】

参与観察初日の受講者は8名であり、授業が開始する前から図7右側に設置された机に座る3名の受講者が話をしていました。様子を伺うと、夏休みに何をしているのかをドイツ語で話しているようであった。被験者D・F・Jイタリア人3名も席が遠いながらも最近は何をしているのか、みな母国語がイタリア語にも関わらずドイツ語で話をしていました。この様子から、授業開始以前から、このクラスのドイツ語学習のモチベーションが高いことが伺える。一人のポーランド人男性はぼつんと隅に座り、使用教材を眺めていた。授業が始まる10分前に教員が教室に入り、受講者たちと挨拶を交わしていた。

まずは受講者の自己紹介から始まった。出身国、ベルリンの滞在期間、職業、ドイツ

語の学習理由を一人ずつ、指していった。新規履修者 2 名も同様に質問を受けたあと、筆者が当てられた。市民大学のディレクターと今回の参与観察について話をしていたが、教員は私のことをきちんと把握していなかったようで、研究者として参加していることがこの場で初めて認識された。ただ、筆者が 22 才とこのクラスで最年少であったため、そこまで真剣に研究しているようには捉えられていなかったようで、受講者の一員として教員も受講者も私と接してくれた。

自己紹介は 15 分程度で終わり、いよいよ授業が開始した。教材 Hueber 社の “Schritte PLUS “をみな取り出し、授業が始まると思いきや、教員自身が教材を忘れたことに気づき、受講者 1 名の教材を借りる事態となった。教員は特に悪気もなく借りていたことに對し、教員らしさは感じられず、それよりも受講者と大分距離が近いのではないかと考えた。新規履修者を含めた全員が、教材をすでに購入し持参していたことに感心したが、皆共通してノートを持ってきていたことにも、モチベーションの高さが伺えた。

授業自体は教材の単元 1 から順に行われていった。初回の授業で感じたことは、文法を説明する際に教員が作成するセンテンスが、受講者の背景と一致していることが多いということである。例えば、“Als “について説明をする際、既婚者（被験者 B・C・F・G・I・J）が 6 名いるため、「私がドイツに来たときは、（家族が皆ドイツにいるため）満足していた。」といった例文を黒板に書いていた。また、新しい単語が出ると、必ず一人ずつ名指しし、自分のことを発言させていた。

#### 【参与観察 5 日目】

この日に時間通りに来た受講者は一人もおらず、8 時 30 分に教室にいたのは教員と筆者の 2 名であった。10 分以内に欠席者 1 名を除く全員が揃ったため、そこから授業が開始した。毎回宿題は必ず出ており、だいたい課題 3 問程度が出題されるため、授業開始直後は宿題の答え合わせから始まった。教員は一人ずつ名指しし、回答させていくが、毎回受講者は必ず宿題を済ませていた。この点から、受講者はドイツ語を継続して学習していく意欲が見られた。授業全体を通しては、ペアもしくはグループで取り組む課題が毎回あり、一人で考える時間よりも隣の人と話をしながら回答していく時間が多く取り入れられていた。リスニングは毎回の授業で必ず行われ、話す力のみならず聞く力も鍛えようとするカリキュラムであることが伺えた。日常生活を送る上で、例えば、住民登録を行う際に聞く力がなければ登録すら困難を極める。授業全体の進行内容を考えると、話せること以上に聞ける能力を重視しているのではないかと感じた。



## 第五項 教員と受講者の関係性

教員と受講者の関係性は、授業開始前後や休憩時間でのやりとりから、親密なものではないかと感じた。参与観察初回授業の開始以前では、教員と受講者が一対一で親しげに夏休みの出来事について話をしており、個人的な話をし合う仲であることが分かった。そもそもこのクラスは、初習レベル A1.1 からの持ち上がりで、今回の受講者 12 名中 8 名が継続履修者ですでに知り合いであり、参与観察 1 日目の教員も以前同じメンバーの授業を担当していたようで、関係が十分に築かれた状態からのスタートであった。そのため、授業中も受講者の発言が多く、教員が名指しして発言を促すよりも、おのおの自分の意見を伝えようとする意思が強くあることが読み取れた。新規履修者に対しても、休憩時間 30 分の間に、その人に対する個人的な質問、例えば、なぜベルリンに来たのか、母国ではドイツ語を勉強していたのか、誰かと一緒にここへ来たのか、などを積極的に質問し、受講者のことを教員が分かろうとしていた。中級レベル B1.1 のクラスであったため、授業中もまず英語を話すことはなく、皆がドイツ語を学ぼうとする意欲が高く、教員もそれに答えようとする姿勢が見受けられたため、学習環境に適した雰囲気作りがなされていた。

このクラスは教員が 3 名おり、月曜日・火曜日は教員 A、水曜日・木曜日は教員 B、金曜日は教員 C といった形で指導者が変わる。教員 A と教員 B はすでに初習レベル後半の A2 コースでこのクラスを持っていたため、受講者とも親しげに会話をしているのが伺えた。教員 C はこのクラスを持つのは初めてであったそうだが、授業開始前に一人一人名前を聞き、それぞれネームカードを作るように指示し、それをテーブルにおいて授業が始まった。教員 C は休憩中、教室に残っている受講者に話しかけ、どの程度ドイツ語をここで学んできたのか、なぜドイツ語を学習し始めたのかを聞き、そこから自分自身について話していた。全ての教員に共通していたのは、受講者と近い距離で接しようとしていたことである。受講者が教員に“Sie”ではなく“du”<sup>56</sup>を使って質問した際も、特に指摘をすることなく、そのまま答えていたことも、距離感の近さを示している。指導する教員と指導される受講者という関係性を越えた、親密さがこのクラスの良い雰囲気作りに繋がっているのではないかと考える。

---

<sup>56</sup> „Sie “とは、目上の人や初対面の人に対して使う「あなた」という意味。

„Du “とは、家族や友人といった、親しい間柄の人に対して使う「きみ」という意味。日本語の敬語と異なるのは、Sie と Du は上下関係を表すのではなく、2 人の距離関係を示すものである点である。

## 第六項 受講者間の関係性

筆者の懸念としては、受講者の出身国が偏っていたために、国別のコミュニティーができていくのかという点があったが、実際は皆社交性があり、一人一人が友達になろうとしていたことが伺えた。中には、授業外では一切ドイツ語を話すことなく、常に同じ人としか会話をしない者もいた。図7に示した左下に設置された机に座る被験者Aと被験者Eはイタリアからの新規履修者であり、かつ年齢も近いということがあって、常に2人で行動を共にしていた。授業に遅刻することも多々あり、初回の授業ではそのうちの一人が教科書を未購入であったことから、ドイツ語学習の意欲が他の受講者と比較して低いのではないかと考えた。それ以外では、皆が互いのことについて知り合おうという気持ちが高かったように思える。すでにクラスメイトであった者も、彼らだけにかたまるのではなく、新規履修者に声をかけ、仲良くしようとする姿勢が見えた。その際に使用された言語は、ポーランド人同士の会話（図1右上：被験者C・G・I）でもドイツ語であり、そこから常にドイツ語習得の熱心さが伺えた。筆者にも一クラスメイトとして接してくれ、なぜその研究をしているか、日本の大学では何を学んでいるのか等を聞いてきてくれた。

さらに、ムードメーカー的存在が一人いたからこそ、クラスの雰囲気が良かったことも言える。被験者Dは毎回非常に陽気でユーモアに溢れ、授業中も笑わせることが多く、授業外でもクラスメイトとFacebookで繋がりパーティを企画していた。こういった存在がいたからこそ、授業の出席率も高く、ドイツ語学習の意欲も全体として高かったことが言えるのではないかと感じた。

## 第七項 考察

筆者の参与観察した語学コースは、受講者間や受講者と教員同士の距離が非常に近く、学習環境に適した状況で授業が行われていた。語学を上達させるためには、まずその人のモチベーションを向上させる必要があり、その際重要となってくるのは属するコミュニティーの親密さであり、ここではクラスの雰囲気である。第五・六項で記述したように、このクラスの大半はもともとドイツ語初期段階からのクラスメイトであり、教員も過去に教わったものであった。そのため、すでに仲睦まじい雰囲気ができあがっており、途中のレベルから参加した受講者も毎日クラスに授業を受けにきたくなるような空気が漂っていた。今回の受講者は、ドイツ連邦移民・難民局から受講の義務を告げられたのは被験者Bのみであり、他の受講者はドイツ語学習のために意欲的に受講していた

という背景も、このクラス全体におけるドイツ語習得の意欲の高さに繋がっていったのであろうと想定できる。移民をドイツ社会に適応させるために始まった統合コースであったが、長期間かけて構築していく人間関係が、ドイツに馴染ませる方法の1つとなるのではないであろうかと、この語学コース参与観察を通して感じた。

## 第二節 オリエンテーションコース

### 第一項 概要

統合コース二本の柱であるもう1つのコース、オリエンテーションコースについて、2013年9月16日～2013年9月20日までの参与観察を第二節で述べる。

以下の表4は、筆者が参与観察対象としたコースの概要を示したものである：

学校名	Die Berliner Volkshochschulen Neukölln
所在地	Comeniushaus, 12055 Berlin, Lahnstr. 78, Raum 112
コース名	オリエンテーションコース インテンシブ (Orientierungskurs Intensiv)
教員	Klusmann, Elke
費用	72ユーロ
実施期間	9月16日(月)～10月1日(金)(土日除)
授業時間	13時～17時05分(休憩30分間含む)
参与観察期間	9月16日(月)～9月20日(金)の5日間
受講人数	15名

表4 参与観察対象「オリエンテーションコース」の概要

表3に示す通り、オリエンテーションコースは語学コースとは異なり、全12日間で授業が完結し、中級コースであるB1レベルの語学コースを受講し終えた受講者が自分の都合の良い時期に受講する。筆者がノイケルン市民大学を訪れた際に、すでに始まっていたオリエンテーションコースもあったが、授業は導入が肝心であり、どのような雰囲気、教員がどういった工夫を凝らしながらそのクラスを指導していくのかの経緯も研究するために、初めから参加できるこのコースへの参与観察を決定した。

### 第二項 受講者の属性

初日の受講者は筆者を含まない15人で、出身国はそれぞれ、ポーランド(2)、スペイン(2(うち1カタロニア))、エジプト(2)、イタリア(1)、モロッコ(1)、セルビア(1)、

ガーナ(1)、カナダ(1)、オーストラリア(1)、ベネズエラ(1)、ナイジェリア(1)、トルコ(1)(カッコ内は人数)であった。翌日(9月17日)からポーランド人(1)が参加するようになった。国籍はカナダ人がイギリスの国籍も持っているということで、二重国籍であったが、それ以外は出身国と同様であった。ポーランド人女性は祖父がドイツ人であり、ドイツのパスポートを持っているが、ドイツで生まれ育ってはならず、ポーランド語しか流暢には話すことができない。

より詳しい受講者の属性を知るために、参与観察最終日の授業後に簡単なアンケートを実施した。アンケート実施日の出席者が12人であったが、ガーナ人、ナイジェリア人、モロッコ人の3名がアンケートを拒否したため、回答者は9名となった。ガーナ人のアンケート未回答理由としては、何のために私がアンケートに答えるのかわからない、この研究は何のためにやっているのか、と私の研究に不信感を抱いているようであった。詳細は後述するが、ガーナ人は10年以上前にドイツに移り住んできた者であり、永住するためにオリエンテーションコースを受講する必要があると連邦移民・難民局から要請を受けたために今回参加している。国からの監視がある中でのアンケート調査となり、自分の情報が世の中に漏洩することを恐れているのではないかということが感じられた。ナイジェリア人の未回答理由は、アンケート実施が授業後であり、すでに授業で頭を使い、アンケートに答える労力がないということであった。モロッコ人に関しては、ガーナ人と同様の理由で、なぜ自分がアンケートに答えなければのか、ということであった。この3名に共通して言えることは、ドイツ語をあまり理解できていないということである。ナイジェリア人は授業中の発言も多く、出席率も高いことから、このコースへの意欲は伺えるが、休憩中は他の受講者と会話をすることはまずなく、自分の世界に入っていることがしばしばあった。ガーナ人とモロッコ人は、すでにB1レベルまで語学コースを受講したとは思えないほど、単語の知識が低く、授業中もいつも頭を抱えているようであった。筆者がアンケートを実施する前に、研究の意図やアンケート使用に関する留意点を伝えたが、それも理解できていないようであった。よって、今回のオリエンテーションコースではアンケート回答者が11名となり、集計結果は以下の通りである。(表5参照)

アンケート回答者:9名 (数字は人数を表す)

被験者	A	B	C	D	E
1) 性別	女性	女性	男性	女性	女性
2) 年齢層	23歳	24歳	25歳	26歳	26歳
3) 職業	学生	掃除婦	失業者	販売員	学生
4) 国籍	スペイン	ポーランド	イタリア	ポーランド	ポーランド
5) 配偶者の有無	無	無	無	有	有
6) 子どもの有無	無	無	無	無	無
7) 滞在期間	11ヶ月	4年5ヶ月	11ヶ月	1年7ヶ月	1年1ヶ月
8) 渡独理由	修士を取るため	職を見つけたため	・ベルリンが未来の街であるため ・安いため ・知り合いがいるため	職探し	・配偶者がドイツ勤務 ・自分も良い職を見つけたため
9) ベルリンへの移住理由	安い街であるため	〃	〃	〃	配偶者がドイツで職を見つけたため
10) 家庭内の使用言語	スペイン語	ポーランド語	イタリア語・英語	ポーランド語	ポーランド語
11) オリエンテーションコースの理解度	80%	60%	100%	70%	95%

被験者	F	G	H	I
1) 性別	男性	男性	男性	男性
2) 年齢層	27歳	34歳	34歳	47歳
3) 職業	失業者	教師	失業者	エレクトロニカ
4) 国籍	スペイン(カタロニア)	エジプト	カナダ・イギリス (二重国籍)	セルビア
5) 配偶者の有無	無	有(ドイツ人)	無	有(ドイツ人)
6) 子どもの有無	無	有	無	無
7) 滞在期間	1年7ヶ月	10ヶ月	2年	1年
8) 渡独理由	仕事がなかったため	配偶者がドイツ人のため	・職探し ・海外経験を積むため ・ドイツ語習得	配偶者がドイツ人のため
9) ベルリンへの移住理由	ただ単にベルリンが素晴らしいため	・教員としての職探し ・より勉学に励みたい	ベルリンに良い噂を耳にしたため	配偶者が40年ドイツ在住
10) 家庭内の使用言語	ドイツ語・英語	英語・ドイツ語	英語	セルビア語・ドイツ語
11) オリエンテーションコースの理解度	99%	75%	90%	50%

表 5 オリエンテーションコースのアンケート結果

表 4 に示す通り、このコース受講者の最年少は被験者 A の 23 歳で、最年少は被験者 I の 47 歳である。年齢層は 20 代が参加者の半数以上を占めており、6 名全員がヨーロッパ市民で、ポーランド人(3)、スペイン人(2)、イタリア人(1) (カッコ内は人数を表す)であった。自国にいても職を見つけることが困難であり、従って大都市のベルリンに来て就職先を探そうということで渡独しているものがほとんどであった。彼らはドイツに 10 年ほど滞在したいと考えている者もいれば、今は何もわからず現在の生計をたてるのに精一杯であるという者もあり、まだ年齢的に若いからこそそういった考えに結びつくのだろうと考えた。一方で、被験者 G と被験者 I はどちらも妻がドイツ人であるために来独し、被験者 I はドイツに長期滞在することを考えており、もう一方は 1 年したら妻と一緒に帰国することを考えているそうである。帰国理由としては、彼は先生としての資格を持っているためエジプトでは水準の高い生活を送れることが大きな点で

あるそうだ。妻とはもともとエジプトで出会ったために、夫婦でエジプトに戻ることに  
関して障害は特になく妻も賛同しているため、タイミングを見計らって帰国をするよう  
である。

どの受講者も少なからず1年はドイツに滞在しており、簡単な日常生活程度のドイツ  
語は理解することができる。もともとオリエンテーションコースは、上記に記述したよ  
うにドイツ語レベルが初習レベル後半のA2.2に達しないと受講することができない。  
オリエンテーションコースの受講は、A2の認定試験を受けた後でも受ける前でも可能  
であり、クラスのほとんどが認定試験受講前であった。ドイツに来てゼロから語学学習  
者であったため、皆が同じタイミングでレベルをクリアしていったために、2012年に  
渡独したものが多く集まったことが言える。

家庭内の使用言語については、被験者Fと妻がドイツ人である被験者Gのみが母語を  
一切話さず、ドイツ語と英語を日常会話で使用していることがわかった。オリエンテ  
ーションコース理解度も、被験者Fは99%と高くほとんど授業内容を理解していた。被  
験者Gは理解度を75%と回答しているが、授業中の発言も多く、分からなかったこと  
は確実に教員に聞き、ドイツ語も他の受講者と比較すると流暢に話しているため、実際  
はクラスの中で理解度が高いのではないかと感じた。日常生活で母語をまず一切はなさ  
ず、家庭内ではドイツ語と英語を使用していることが、この結果に結びついたのではな  
いかと考える。ただ、日常生活でドイツ語を使用しているから授業の理解度が高いとい  
うことは一概には言えない。被験者Iも妻がドイツ人であり、日常生活でセルビア語と  
ドイツ語を話しているにも関わらず、理解度は50%とクラスで最も低かった。また、  
クラスで最もドイツに長期滞在している被験者Bは、理解度が下から2番目の60%で  
あった。これは、ドイツ語の理解度も重要ではあるが、それ以前にドイツという国に限  
らず一般的な政治経済に対する理解度がより重要視されるのではないかと考えられる。  
詳細は第三項「教材」で後述するが、この授業はドイツの成り立ちや法律、政治体制と  
いった複雑なテーマを扱うため、予備知識がないと理解が困難である。しかし、ドイツ  
語レベルが十分になくても前提知識があれば教材に印刷されている写真や表で理解す  
ることができる。つまり、オリエンテーションコースの理解度はドイツ語レベルに必ず  
しも比例するわけではなく、そもそもの前提知識の違いが大きく影響してくるのである。

### 第三項 教材

ノイケルン市民大学では、特に決まった教材をオリエンテーションコースで使用して  
いるわけではなく、授業を持つ教員が自分で採用した教材を使用している。参与観察し

たクラスでは、教員が自ら作成した教材を使用し、授業がそれに沿って進行していく。  
下記の図7は、参与観察対象の授業で使用された教材の一部である：

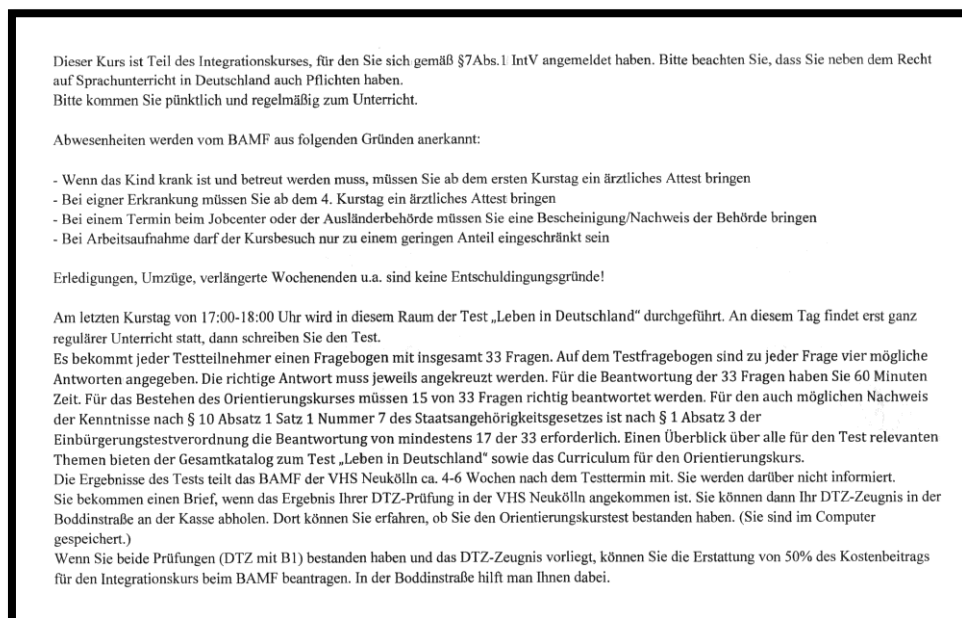


図7 オリエンテーションコース教材1ページ目<sup>57</sup>

図7に見られるように、配布プリントの1ページ目にはドイツ連邦移民・難民局が制定した第7条に基づくオリエンテーションコースの説明が書かれた文章が記載されている。コース最終日にテストが行われ、ある一定以上の正解数で合格し、さらにDTZ(Deutsch-Test für Zuwanderer)の中級に相当するB1レベルに合格すれば受講料の半分の返金される<sup>58</sup>ことも記されている。

同教材の次ページ行こうは、実際のドイツ難民移民局が指定した内容が扱われている。テーマは以下の通りである<sup>59</sup>：

1. Deutsche Rechtsordnung, Geschichte und Kultur (ドイツの法秩序や歴史、文化)

<sup>57</sup> BAMF, “Integrationskurs - Was ist das?”

<http://www.bamf.de/DE/Willkommen/DeutschLernen/Integrationskurse/integrationskurse-node.html> (最終閲覧日：2014年1月16日)

<sup>58</sup> Internationaler Kulturverein Sprachakademie e.V. „Bekommt man nach dem Integrationskurs Geld zurück?“参照。

<http://www.iks-in.de/images/iks-faq4.pdf> (最終閲覧日：2014年1月17日)

<sup>59</sup> BAMF, “Inhalt und Ablauf “より引用。筆者翻訳

<http://www.bamf.de/DE/Willkommen/DeutschLernen/Integrationskurse/InhaltAblauf/inhalt-ablauf-node.html> (最終閲覧日：2014年1月16日)

2. Rechte und Pflichten in Deutschland (ドイツにおける権利と義務)
3. Formen des Zusammenlebens in Gessellschaft (社会における共同形成)
4. Werte, die in Deutschland wichtig sind, zum Beispiel Religionsfreiheit, Toleranz und Gleichberechtigung (ドイツで重要視される価値 例：宗教の自由、寛大さ、平等)

**1 Nationalism**

a) Was sehen Sie auf den Bildern? Ordnen Sie die Wörter aus dem Kasten zu.  
b) Welche Farben hat die deutsche Flagge? Malen Sie die Flagge aus.

**A** **B**

das deutsche Staatswappen

**C**

die deutsche Flagge

die deutsche Nationalhymne  
die deutsche Flagge  
das deutsche Staatswappen

c) Wo haben Sie die Nationalsymbole schon gesehen oder die deutsche Hymne gehört? Sprechen Sie im Kurs und kreuzen Sie an.  
Die Symbole benutzt man in Deutschland  
 auch privat.  hauptsächlich zu offiziellen Anlässen.

d) Ergänzen Sie die Sätze.  
1. Die deutsche Flagge hat (von oben nach unten) die Farben schwarz, rot, gold.  
2. Auf dem Staatswappen stellt man einen Adler. Seine Füße sind rot.  
3. In der Nationalhymne wiederholen sich die Wörter Einigkeit und Recht und Freiheit. Das Lied hat 3 Strophen, aber nur die 3. Strophe singt man.

**2 Was denken Sie: Wie alt ist Deutschland?** 1930  
 ca. 1200 Jahre  ca. 800 Jahre  ca. 150 Jahre

**3 „Einigkeit und Recht und Freiheit ...“ Was könnten diese Wörter bedeuten?**

b) Was könnten diese drei Wörter für Deutschland bedeuten? Kreuzen Sie an.  
Einigkeit bedeutet hier:  
1.  Die Menschen in Deutschland sind sich einig und haben keine Probleme.  
2.  Deutschland soll ein unabhängiger Staat sein, nicht in zwei oder mehrere verschiedene Staaten aufgeteilt.  
Recht bedeutet hier:  
1.  Es gibt feste Grundrechte und Gesetze, die für alle, auch für den Staat, gültig sind.  
2.  Die Deutschen haben immer Recht.  
Freiheit bedeutet hier:  
1.  Jeder darf tun, was er will.  
2.  Jeder darf seine Meinung frei äußern, seine Religion frei wählen und ausüben, seinen Wohnort selbst bestimmen, seinen Beruf frei wählen und vieles mehr.

**4 Die BRD. Das ist der offizielle Staatsname von Deutschland.**  
a) Ergänzen Sie die fehlenden Buchstaben.  
Bundesrepublik Deutschland  
b) Was bedeuten die Buchstaben? Verbinden Sie.  
**B**  Das ist die Staatsform. Republik heißt: an der Spitze vom Land steht ein Staatsoberhaupt, kein König. In Deutschland ist das der Bundespräsident. Das Volk wählt ihn (indirekt) für 5 Jahre.  
**A**  So heißt das Land. Die Menschen sind die Deutschen, die Sprache ist Deutsch.  
**D**  Das ist der Staatsaufbau. Deutschland ist zwar ein Staat, besteht aber eigentlich aus mehreren Teilstaaten. Die staatlichen Aufgaben sind zwischen dem Gesamtstaat (dem Bund) und den Teilstaaten (den Bundesländern) geteilt.  
Die Staatsform Republik und der Staatsaufbau in Bund und Länder sind in der Verfassung von Deutschland, dem Grundgesetz, festgelegt.

図 8 オリエンテーションコース教材 2 ページ目

教員が自ら作成したこの教材の 2 ページ目は、図 8 左上に見られるようにドイツ国家の紋章やドイツ国旗の色、さらに国歌について、ドイツの基本的な知識を学習させることから始まっている。基本的にどのページにもイラストや写真が多用され、受講者を飽きさせない工夫がされていた。使用されているドイツ語も簡単な言葉をなるべく用いて、習得に困難な語彙がある場合には必ず黒板に書いて覚えるよう指摘していた。

さらに、ドイツにおける法律の概要や憲法に関するテーマを扱った教材が、図 9 に示すものである：



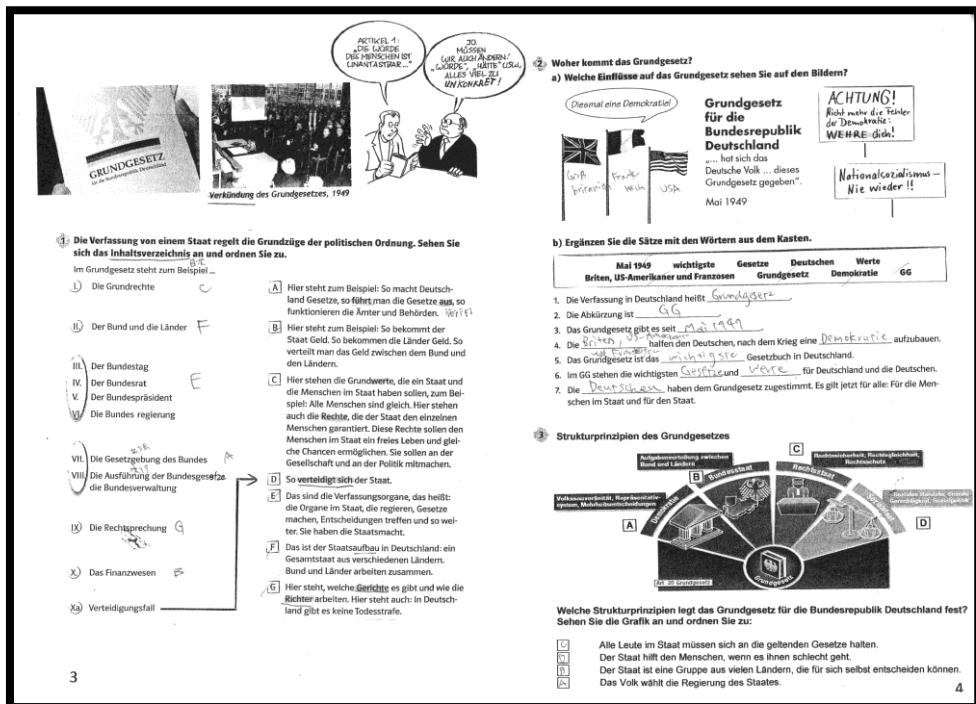


図 9 オリエンテーションコース教材 3 ページ目

図 9 のページには、左から法律の具体的な内容、右上は法律の概要、そして右下には法律の構造理念について記載されている。基本的に問題形式になっており、一致するもの同士を結び合わせるか、空欄に言葉を補うもののどちらかである。

教材は全部で 8 枚あり、毎日半ページずつ学習していく。問題形式で授業を行う点に関しては、最終日に 1 時間かけて行われるテスト「ドイツでの生活（“Leben in Deutschland”）」を強く意識していることが伺える。受講者のテスト合格率が教員の昇級にも関わってくるため、一段と力が入っているのではないかと考えることができる。

#### 第四項 授業の進行

次に、オリエンテーションコースの授業進行に関する観察および説明をおこなう。以下に示すのは、参与観察対象としたコースの授業教室を図式化したものである。(図 10)：

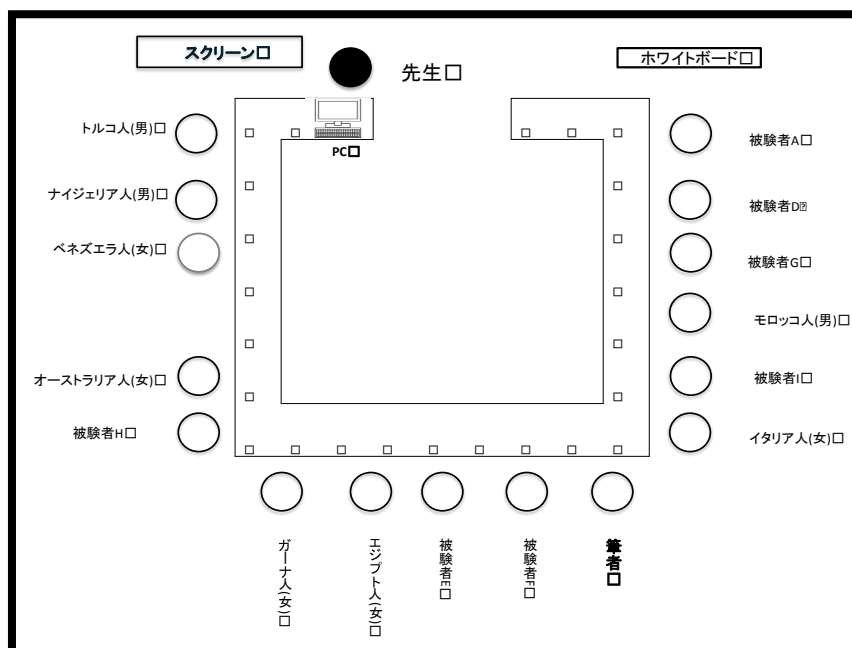


図 10 座席表 (筆者作成)

以下に、参与観察以降のプロセスを時系列で記述する。

### 【参与観察 1 日目】

筆者は授業開始 30 分前に教室に着き、その頃すでに 1 名の受講者がいた。一人のトルコ人女性は、受講しないトルコ人男性と子ども引き連れて教室に来て、授業が始まるまで家族で一緒に廊下でいた。授業開始時間がせまるにつれて、教室にも人が増え、来た人から順に自由に席を埋めていった。中には同じ語学コースを受講していた者もいたようだが、ほとんどの受講者は授業開始前に誰かと話すわけでもなく、いすに腰掛け、教員が入ってきても教室は静かであった。

13 時丁度に授業が始まり、まずは自己紹介から行った。出身国、いつからドイツにいるか、なぜドイツに来たのか、今の職業はなにか、の 4 点を一人ずつ話していく。自己紹介の途中でベネズエラ人女性が遅刻して入ってきて、初回の出席者 15 名全員が揃った。そのあと、紙が配られ自分の名前を書いてネームプレートを作成した。教員と受講生は面識が一切ないため、12 日間で完結する授業でも一人一人名前と出身国を覚えようとする努力が伺えた。

授業に進む前に注意点が 3 点説明された。1 点目は、わからないことがあったときには必ず教員に質問もしくは受講者同士で聞きあう、ということである。12 日間という短い間で様々なことについて覚えないうけないといけないため、授業進行もはやく、専門用語も

多い。ただそこでわからないことをうやむやにしたままだと、さらに理解に苦しむことが容易に想像できるため、疑問があったらその場で聞くことを意識してほしいと伝えられた。また、それぞれのネイティブレベルの言語と英語の理解度を一人ずつ聞き回り、どうしたら皆が難しいテーマを理解できるようになるのかを教員は考えていた。教員自身が、ドイツ語のみならず英語と少しロシア語を話すことができるため、授業中にロシア語でも説明することができる発言していた。授業開始以前から、このような質問をすることより、オリエンテーションコースのテーマがやはり中級相当である B1 レベルの履修者には困難であるということが想定できる。

2 点目の注意点は、授業の構成についてである。13 時から 17 時 5 分まで授業が行われるが、難しいテーマで集中力が途切れやすいことから、休憩を 15 時に取るだけでなく、それ以外に 2 回ほど短い休憩を取ることが伝えられた。3 点目は、最終日にはドイツ連邦移民・難民局が実施するテストに合格しなければならないということである。そもそもドイツ連邦移民・難民局という単語 (BAMF : Bundesamt für Migration und Flüchtlinge) を受講者が知らず、ここから受講料が払われるのであると教員が強調していた。テストの合格点も具体的な数字を述べて説明し、今から試験のことを頭に入れて授業に集中して取り組んでほしいと教員が何度も述べていた。また、返金希望で受講している受講者は、テストの点以上に出席率が重要であるとも伝えていた。統合コースという名の授業であっても、B1 の語学試験とオリエンテーションコースの試験両方に合格すれば、受講料の 50% が返金され、それが理由でこのコースを受講している受講者が例年多い。このクラスも 9 名中 6 名が返金のためにコースを受けており、そういった受講者のモチベーションの低さからくる出席率の低下を懸念して、冒頭に強調していることが伺えた。

1 時間程度が経過してからようやく授業が本題に入る。どのテーマを取り扱うにしても、いきなりプリントを見て問題を解くよりも、まずは受講者たちに問題を投げかけてそこから考えていき、後からプリントを解くという形式で授業が進行していく。例えば、「国の象徴 (National symbol)」について学ぶ授業では、教員がトイレの男女マークやオスとメスのマークをパソコンで書いてスクリーンに映し、これは何が違うのかということ視覚的に考えさせ、そこから標識や看板と象徴のマークの違いを学習していく。

各テーマで出てきた重要単語は、教員がカードに書き込み黒板には張りつけ、それを受講者がノートに書き写す。例えば最初のテーマであれば、“der Frieden “ “der Adler “ “das Wappen “や “die Freiheit “である。毎回重要単語が出てくると、黒板に貼り、授業の終わりにまた単語の復唱をする形式で毎回進んでいった。

### 【全体を通して】

全体的にグループワークはあまりなく、基本的にクラス全体で、教員が問題を受講者に投げかけて受講者が自主的に発言したり、名指した受講者が発言したりしていた。語学コースとの相違点はこれ以外に、母国語を使用することが禁止されていないことが挙げられる。テーマが困難でドイツ語で理解することが難しい時には、教員が似た言語でグループをつくり、確実に理解できるように工夫していた。(例えば、ポーランドチーム・スペイン、イタリアチーム・英語圏チーム等) このことから、言語習得よりもドイツの歴史や法律、社会的習慣を理解させることの方が重要視されていることが分かる。

授業の進行を見てみると、テストを非常に意識した授業構成であることがわかる。授業中に重要単語をカード化して黒板に張りつけ、次の日にはその単語を使って文章を一人一人つくらせることもその1つである。数日経ち、今まで出てきた単語すべてを復習する場面もあり、受講者自身が日々単語を忘れないように教員が工夫していた。他にも、1つのテーマが一段落したら、BAMF の公式サイトに掲載されている本番のテストと同様のもので、同じテーマの問題を次の日に解かせている点もテスト対策に繋がっている。本番のテストで出題される 310 問は、個人での課題としたらやるかやらないかわからないが、授業中に日々こつこつ解かせればあっという間にすべて解ききり、テスト前に焦らずに落ち着いて勉強ができる。教員の受講者に対する心配りから、こういった授業の進行方法が取られていた。

### 第五項 教員と受講者の関係性

教員と受講者の関係性は、語学コースと比較すると希薄ではないかと感じた。そもそも授業開始以前にお互いの面識がない状態からのスタートであり、継続者が多いコースとは異なり、クラスの雰囲気あまり良いとは言えない状況であった。授業開始以前や休憩中、授業終了後でも受講者同士で話をする人は少なく、個人で建物の外に出て行くことが頻繁に見られた。

ただ、授業に積極的に取り組む受講者のなかには、休憩中でも疑問点を聞き、そこから教員との会話が弾むということもあった。ナイジェリア人男性や被験者 G はよく教員に質問をし、母国ではこういう政治体制なのにドイツはこんなにも違うのか、といった話から母国の個人的な話にうつり、教員との距離が縮まるような会話も見受けられた。教員に話を伺ったところ、以前持っていたクラスより今回の受講者のほうがモチベーションが高く授業のやりがいがあると話していた。以前持っていたクラスでは、受講料の返金目的でオリエンテーションコースに仕方なく来る受講者が多く、ドイツの歴史や

政治経済に全く興味を示さず、授業態度も悪く出席率も低かったという。一方で、今回も返金目的の受講者が多いにも関わらず、ドイツの事情について興味関心を持っている受講者が多く、それが教員の授業のモチベーションに繋がるそうだ。そもそも受講者のモチベーションがクラスの良い雰囲気づくりに繋がっているのではないかと考える。

しかし、筆者が参与観察した5日間では、和やかな雰囲気をクラスに感じることはできなかった。全体的にやはりクラス中が淀んだ空気でいっぱいになることが多く、そのたびに教員も短時間の休憩を設け、クラスの雰囲気づくりに励んでいた。

## 第六項 受講者間の関係性

クラス全体で受講者同士の仲が良いというよりも、一部の人でかたまる傾向が見られた。もともと同じドイツ語のクラスであった被験者 E、被験者 F、被験者 G は休憩中に他のクラスメイトの話をしたり授業がなかった期間の出来事についてドイツ語で話したりしていた。それ以外の受講者は、コーヒーを飲みに行ったり新鮮な空気で頭をリフレッシュしたりするために外へ出て、そこに居合わせた受講者と話をしていて。また、同じ言語を母国語とするオーストラリア人とカナダ人(被験者 H)は常に2人一緒に席も隣同士で、授業外では英語を話していた。

一部の人でかたまるという理由には、ドイツ語レベルの差が大きく影響していることが考えられる。受講者は皆 B1 レベルに達していることが前提であるが、実際には中には A2 レベルのドイツ語も習得していないのではないかとと思われる受講者もいた。初歩的な単語、例えば“der Einfluss“(影響)や“die Macht“(力)を分からない受講者が数名おり、一方で“das Gesetz“(法律)や“das Oberhaupt“(最高権威者)などの専門用語をすでに知っている者もいる。ガーナ人女性やモロッコ人男性はドイツ語の単語をあまり知らず、休憩中もドイツ語を話す姿はあまり見られなかった。モロッコ人男性はアラビア語を話すため、エジプト人男性(被験者 G)とよく一緒にいる姿を見かけ、ガーナ人女性は一人でいる姿が目立った。ガーナ人女性がよく一人でいる理由に、あまり自分のことを人に話したくないという点もあるのではないかと考えた。ここからは非公式のインタビュー内容となるが、そもそも彼女はアジール<sup>60</sup>として10数年前に来独し、滞在

---

<sup>60</sup> アジールとは、聖域、平和領域を意味するドイツ語。英語では asylum。ギリシア語の〈不可侵〉という語 asylon に由来するアジールの制度は人類最古の法制度のひとつであり、特定の空間、人物、時間とかかわった人間が一時的に、あるいは持続的に不可侵な存在となる状態あるいはその場を示している。世界大百科事典 第2版より引用。

期間は受講者の中で最も長かった。娘はドイツで生まれ育ち、ネイティブレベルのドイツ語を話すそうである。彼女自身は日常生活で母語しか話さないため、ドイツに長年暮らしていてもドイツ語を上手に話すことができない。もともと母国から避難するようにドイツに移り住んできたため、ドイツ政府の監視もあることが考えられる。そのため、自分の悪い噂でもたったら母国に強制送還させられてしまう可能性があると考え、周囲との関係を築こうとしないのではないかと感じた。筆者が休憩中に個人的に話しかけたところ、渡独理由や彼女の娘の話をしてくれたが、それは筆者が彼女と同じ立場の外国人であったからであろう。母国からはるばる遠いドイツへ一人で来て生活している筆者に、自分のことを話しても特に害がないと考え、プライベートな話もしてくれたことが予想できる。ただ、アンケート回答に関しては、データを研究に使用すると伝えたところ、自分の情報が漏洩する危険性があると感じたため、回答を拒否したことが考えられる。つまり、人の目を気にして生きているために公式な文書に残ることは極限しなくなかったのではないか。こういった様々な背景をもつ受講者が集まり、かつ受講開設の期間がたったの12日間であったことから、クラス全体が仲睦まじい雰囲気ではなく居心地のあまりよくない状況をつくり出しているのではないかと考察する。

## 第七項 考察

オリエンテーションコースの参与観察を通して、授業実施期間の短さがクラスの淀んだ雰囲気をつくりだし、受講者の学習環境に良い影響を及ぼすことができないのではないかと考える。第八章、第一節、第一項で述べたように5週間に渡って実施される語学コースとは異なり、12日間という2週間にも満たない期間で学習していくオリエンテーションコース。どちらのコースもドイツ社会に適応するために政府が巨額を投資してまで実施している統合コースであるが、そんな短時間でドイツの価値基準を移民に習得させることは可能であろうか。ここで問題視したいのは、ただ単に学習期間が短いという点のみならず、受講者が学習しやすい環境をつくり出せていないということである。学習しやすい環境とは、分かりやすい教材を使用したり、分かりやすく簡単なドイツ語で説明してくれる質の高い教員を起用したりするということが思いつくが、最も重要なのは、受講者自身が積極的に学びたいと思える環境づくりなのではないかと訴えたい。いくらどんなに良い教材や良い教員を起用したからといって、受講者が勉強をしたいと思うかというところではない。受講者が互いに切磋琢磨しながら勉強していきたいと思える仲間と出会えるかということである。オリエンテーションコースも語学コースのように、長期間かけて持ち上がりのクラスで受講することを必須とすれば、今回の参与観

察対象としたクラス以上に、明るい雰囲気受講者一人一人の学習意欲があがり、ゆくゆくは最終日に行われるテストの結果に繋がるのではないかと考える。人になにか学ばせるといことは、その人の人格を改めて形成することに結びつく。ドイツ人の価値観といった抽象的な事柄は、ドイツ人以外の人々に共有することは容易ではない。しかし、時間をかけて学習しやすい環境で教育していくことで人格形成に繋がり、そこから自然と価値観が共有され、いずれはドイツへの社会統合に結びついてくのではないか。

## 第九章 終章

今回の語学コースとオリエンテーションコースの参与観察を通し、ドイツ政府の推進する統合コースと実際に現場で行われている統合コースでは、乖離があることが検証された。2005年から開始された統合コースは、ドイツという国について知識も何もない移民たちが定住し始めたことによって、独自のコミュニティが形成され、ドイツ人と移民の間で衝突が起きたことが原因で開始された。その不和を解消するために、ドイツ語習得のみならずドイツの基本的概念を学ぶ機会を提供している。しかし、実際に参加してみると、オリエンテーションコース受講者の半数以上がヨーロッパ市民であった。そもそも民主主義とは何かという根本的なことを教えるために設立された授業にも関わらず、受講者のほとんどが民主主義という概念のみならずドイツの歴史的背景についてすでに承知であった。彼らはオリエンテーションコース受講の義務はないが、語学コースを安く受講するために参加しているのである。筆者が参与観察したオリエンテーションコースの教員に話を聞いても、やはり知識レベルが全く異なる受講者が集まると、指導が非常に困難であると述べていた。2006～2009年まで教員自身がアーヘンでオリエンテーションコースの教師として働いていたころは、1度だけポルトガル人の受講者がいたが、それ以外は皆イランやイラク、トルコなどからの移民であったようだ。その際、受講者のドイツに関する知識レベルがほとんど同じであるため、授業もしやすかったという。だが、ベルリンに来てみると多文化社会ということもあり、義務教育でドイツについて詳しく習ったEU市民と、ほとんど知識のないトルコ移民やイラン・イラク移民が同じ空間で授業を受けているのである。様々な出身国からの受講者がいることは、世界について知る良い機会ではあるが、本来の統合コースの目的が達成されているかはまだ別の話となる。本当にドイツについて学ばなければならない者を再度熟考するべきである。

他に目立つ問題点としては、短期間での学習カリキュラムが組まれていることである。

言語のみならず全てのことに共通して言えることは、何かを学習するにはある一定以上の期間が必要であるということである。短期間で学習しては、その場では理解していたとしても、一生頭に残る知識とはならない。また、期間は学習環境にも繋がっていく。語学コースのように同じクラスメイトで持ち上がっていくと、そのクラスの雰囲気がよく学習に対するやる気も非常に高い状況が維持される。一方で、12日間という限られた期間では、友達をつくることから始めるとあまりにも時間が短く、仲良くなったと思いきやクラスが解散され、二度と会う事がない状況になる。もしオリエンテーションコースも語学コースのように持ち上がりで、すでに仲睦まじい雰囲気のクラスで受講することができれば、より受講者のモチベーションも高まり、ゆくゆくはドイツ人と移民の間に生まれた不和が解消していくのではないかと感じる。

今回の研究は、あくまでも筆者のベルリン・ノイケルン市民大学での参与観察に基づき分析された結果であり、他の統合コースが同様の結果になるとは一概には言えないが、これは一つの検証結果として受け止め、ドイツ全体における統合コースの現状把握は今後の課題である。



## 参考文献

石川真作『ドイツ在住トルコ系移民の文化と地域社会 -社会的統合に関する文化人類学的研究-』立教大学出版会、2012年

岡本奈穂子『多文化社会を考える -ドイツの変容と日本の未来-』かわさき市民アカデミー講座ブックレット No. 32、2008年

工藤幹巳・早川東三『ドイツを知るための60章』明石書店、2001年

鈴木規子『EU市民権と市民意識の動態』慶応義塾大学出版会、2007年

内藤正典『ヨーロッパとイスラーム -共生は可能か-』岩波新書、2004年

内藤正典+一橋大学社会地理学ゼミナール『ドイツ再統一とトルコ人移民労働者』明石書店、1993年

野口恵子『新版ドイツの中のトルコ -移民社会の証言-』つげ書房新社、2007年

宮島喬『一にして多のヨーロッパ -統合のゆくえを問う-』勁草書房、2010年

AFPBBnews 「人種差別発言でドイツ中銀理事解任へ、タブーに踏み込んだとの評価も」2010年

<http://www.afpbb.com/article/politics/2753050/6139853> (最終閲覧:2014年1月17日)

BBC NEWS ” Merkel says German multicultural society has failed” 2010

<http://www.bbc.co.uk/news/world-europe-11559451> (最終閲覧:2014年1月17日)

Bundesamt für Migration und Flüchtlinge „Integrationskurs - Was ist das? “

<http://www.bamf.de/DE/Willkommen/DeutschLernen/Integrationskurse/integrationskurse-node.html> (最終閲覧:2014年1月17日)

DW.de ” Chancellor Merkel says German multiculturalism has 'utterly failed'” 2010

<http://www.dw.de/chancellor-merkel-says-german-multiculturalism-has-utterly-failed/a-6118859-1> (最終閲覧:2014年1月17日)

Internationaler Kulturverein Sprachakademie e.V. „Bekommt man nach dem Integrationskurs Geld zurück? “

<http://www.iks-in.de/images/iks-faq4.pdf> (最終閲覧:2014年1月17日)

Statistisches Bundesamt “Bevölkerung und Erwerbstätigkeit -Ausländische Bevölkerung Ergebnisse des Ausländerzentralregisters- “ 2011

[https://www.destatis.de/DE/Publikationen/Thematisch/Bevoelkerung/MigrationIntegration/AuslaendBevoelkerung2010200117004.pdf?\\_\\_blob=publicationFile](https://www.destatis.de/DE/Publikationen/Thematisch/Bevoelkerung/MigrationIntegration/AuslaendBevoelkerung2010200117004.pdf?__blob=publicationFile) (最終閲覧:2014年1月17日)

17日)

伊東直美「ドイツにおける統合政策－帰化テスト（Einbürgerungstest）の統一基準をめぐる議論から－」

[http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es\\_7\\_Ito.pdf](http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es_7_Ito.pdf)（最終閲覧：2014年1月15日）

金箱秀俊「移民統合における言語教育の役割－ドイツの事例を中心に－」2010

<http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/refer/pdf/071903.pdf>（最終閲覧：2014年1月16日）

熊谷徹「ケルンのモスク論争」2007年

<http://www.newsdigest.de/newsde/column/dokudan/370-669.html>（最終閲覧：2014年1月17日）

小林薫『ドイツの移民政策における「統合の失敗」』

[http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es\\_8\\_Kobayashi.pdf](http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es_8_Kobayashi.pdf)（最終閲覧：2014年1月17日）

近藤潤三「現代ドイツのモスク建設をめぐる紛争－ケルンにおける政治過程－」

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/dspace/bitstream/10424/1398/1/shakai4797138.pdf>

（最終閲覧：2014年1月17日）

前田直子「移民向け統合コースに関する一考察－オリエンテーションコースに参加して－」2011年

[http://ci.nii.ac.jp/els/110009492100.pdf?id=ART0009960572&type=pdf&lang=jp&host=cini&i&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1389850231&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110009492100.pdf?id=ART0009960572&type=pdf&lang=jp&host=cini&i&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1389850231&cp=)（最終閲覧：2014年1月17日）

松田雅央『トルコ系移民が増えて、どんな問題が起きているのか』Business Media 誠、2010年

<http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1012/15/news033.html>（最終閲覧日：2014年1月16日）

丸尾眞「ドイツ移民法における統合コースの現状及び課題」2007年

[http://www.esri.go.jp/jp/archive/e\\_dis/e\\_dis189/e\\_dis189.pdf](http://www.esri.go.jp/jp/archive/e_dis/e_dis189/e_dis189.pdf)（最終閲覧：2014年1月17日）

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社「英独仏における外国人問題への取り組み及びその課題に関する調査研究報告書」2007年

<http://www.esri.go.jp/jp/prj/hou/hou024/hou24.pdf>（最終閲覧：2014年1月17日）

## 図表リスト

図 1 2011 年 12 月 31 日時点でのドイツにおける外国人人口 .....	16
図 2 ドイツにおける学校制度 .....	20
図 3 外国人生徒・ドイツ人生徒の学校卒業資格(2003 年) .....	21
図 4 クロイツベルクの所在地(赤い部分) .....	26
図 5 SCHRITTE PLUS の表紙 .....	30
図 6 座席表(筆者作成) .....	31
図 7 オリエンテーションコース教材 1 ページ目 .....	39
図 8 オリエンテーションコース教材 2 ページ目 .....	40
図 9 オリエンテーションコース教材 3 ページ目 .....	41
図 10 座席表(筆者作成) .....	42
表 1 「欧州言語を対象とする共通の語学力基準」 .....	23
表 2 参与観察対象「語学コース」の概要 .....	27
表 3 語学コースのアンケート結果 .....	28
表 4 参与観察対象「オリエンテーションコース」の概要 .....	35
表 5 オリエンテーションコースのアンケート結果 .....	37